

近代日本版画家名覧 (1900－1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
後藤洋明（由布院空想の森美術館客員研究員）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
西山純子（千葉市美術館学芸員）	三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
森 登（学藝書院）	樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (11)

【す】

穂菴 (すいあん)

明治後期に色紙判の木版画《鶴》を制作。【文献】『2008 新春版画目録』(2008.1) (樋口)

末川凡夫人 (すえかわ・ほんぶじん) 1905～1961

1905(明治38)年6月、広島県佐伯郡佐伯町(現・廿日市市)に生まれる。小学校卒業後、看板屋に入り、15歳の頃から油絵を始める。1925年は大木茂や橋本千代ら仲間と凡々社試作洋画第1回展(2.20～22 田阪文具店)を開催。同年の第10回広島県美術展覧会(5.1～15 広島県商品陳列所)には油彩画《赤い家》を出品。その後上京し、川端画学校に学ぶ。第8回中央美術展(1927)に油彩画《早春の夕べ》《坂》、第4回白日会展(1927)に油彩画《道》を出品。第5回展春陽会(1927)には油彩画《木》で初入選し、第8回(1930)まで出品。広島美術院第2回展(1927.11.1～7 広島県商品陳列所)に油彩画《温室》《郊外風景 二》を出品し、以後第3・5回展(1928～1930)に出品(4回展は不明)。版画制作を始めた動機や時期ははっきりしていないが、広島美術院凡々社洋画展(1927.7.9～13 中国新聞社)には油彩画《坂》《道》と木版画《風景》《日暮》の4点を出品している。当時、東京では広島出身の詩人関谷忠雄が詩と版画の同人誌『牧神』(1930～1932)を発行しており、末川はその第4号(1930.7)に同人として参加し、木版画《富士》を発表。第5号(1930.8)の同人住所録には「牛込区横寺町9小林方」とあり、1930年7月に同人中村三郎宅で開催された第1回作品批評会(『牧神』5)に出席している。1931年に広島に戻り、油彩画を制作。1933年の広島洋画協会の創立に参加し、第1・2・4回展(1933～1935)に出品。また広島県美術展覧会では審査に当たり、第18・21・23・25回展(1933～1939)に委員として出品している。1937年には末川凡夫人近作展(1937.11.21～23 石見屋町・相良重陽堂)を開催しているが、出品作品は不明。1945年8月の広島への原爆で妻子を失い、失意の日々を過ごす。戦後は絵の具や酒代に当てるために、旧家の求めに応じて襖に枯山水を描いたり、油絵も描いていたとも伝えられていて、作品としては油彩画《群像》(1959)が確認されている。1961(昭和36)年に逝去。なお、作品発表の早い時期の第10回広島県美術展(1925)には「末川正夫」の名で出品していることから、本名は正夫と考えられる。【文献】吉川清『「原爆一号」といわれて』(筑摩書房 1981)／出原均編『年譜』『広島美術の系譜』展図録(広島市現代美術館 1991)／『創作版画誌の系譜』／「文化遺産オンライン」(インターネット検索)(加治)

末木東留 (すえき・とおる)

旧姓は荒井。木版画は独学と思われるが、1928年の第8回日本創作版画協会展に《丘の児》《沼ぞひの道》が初入選。その後も、1929年の第9回日本創作版画協会展に《玉取り》、1931年の第1回新興版画会展(主催:創作版画倶楽部)に《花》《大島風景》、1932年の第2回日本版画協会展に《あざみ》、1935年の第4回展に《雨の山中湖畔》《花と顔》、1936年の第11回オリンピック芸術競技展(ベル

リン)に《競馬》がそれぞれ入選した。その間、1930年に児玉篁・永礼資朗と創作版画誌『刀の跡』(東京 1930～1932.4 5冊か)を創刊し、同年の第1輯に《玩具集 1》《雨の公園》《あざみ》と表紙絵・扉のカット、第2輯は不明だが、第3輯(1931)に《練習》《大島にて》と表紙絵、第4輯(1931.11)に《水郷所見》《電車内にて》と表紙絵・扉のカットを発表。また、1934年には小野忠重らの「新版画集団」に参加。同年の新版画集団小品展に《雨の公園》《ぼたん》、第4回展に《花》《海草運び》《波紋》、第1回アンデパンダン展に《花》、江戸東京風景版画展に《雨の木場》《木倉》《夜の亀戸遊園地》《雨の錦糸公園》、1935年の第5回展に《少女》、翌1936年の第6回展に《競馬》《たそがれ》《風景》を出品し、機関誌である『新版画』の第12号(1934.4)に《ぼたん》、第13号(1934.7)に《木倉》、第15号(1935.1)に《年賀状》、第16号(1935.4)に《太陽のある風景》、第18号(1935.12)に《少女》を発表した。1937年の春頃には末木姓となり、小野忠重らと「造型版画協会」を結成。第1回展(1937)に《出帆》《黒衣の女》《冬山》《工場地帯》、第2回展(1938)に《Aの像》《白い壺》《風景》、第3回展(1939)に《姉妹》《人形と少女》、第4回展(1940)に《窓》《花と少女》、第5回展(1941)に《顔》《風景》を連続して出品。1942年の第6回展は不出品だったようであるが、同年の浜松展(12.1～6 松菱)には《雨の山中湖畔》《暮るゝ河口湖》を出品。翌1943年の第7回展の挨拶文には会員として名を連ねているが、出品目録には名前は無く、その後の消息は不明である。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『第1回新興版画会展目録』／『新版画集団目録』／『造型版画展目録』／『創作版画誌の系譜』(三木)

菅 楯彦 (すが・たてひこ) 1878～1963

1878(明治21)年3月4日鳥取市に生まれる。本名藤太郎。父は盛南と号する日本画家で陶器の絵付などの仕事に携わり、父の手ほどきで絵を学ぶ。幼くして大阪に移り住み、11歳で父が病臥すると父に代わって襖絵などを描いて生計を立てる。父親の死後は絵画を独学。神戸新聞社や大阪陸軍幼年学校の嘱託などとして働きながら画業を深め、1902年国学者・鎌垣春岡の命名により「楯彦」と号す。歴史・国学・雅楽・舞楽などにも造詣が深く、大阪の風俗や風物を描いて大阪を代表する日本画家と云われた。戦前は官展への出品はなく、1951年72歳の時に依嘱されて第7回日展に日本画《山市朝雨》を出品し、以降1960年まで日展・新日展に出品する。1958年日本芸術院恩賜賞を受賞。1962年初代大阪市名誉市民に選ばれた。1963(昭和38)年9月8日逝去。版画は、1920年頃に《正式の寶船》、赤穂浪士の事跡をまとめた『義士大観』(義士会出版部 1921)に《中柱の試研》、木谷逢吟編『大近松全集』付録版画(1921頃)に《庵》などの木版画があるほか、中島重太郎が主宰する創作版画倶楽部の情報誌『版画 CLUB』第2巻第1号(1930.1)に木版賀状が掲載されている。【文献】『美術と文芸』16(柳屋書店 1919.11)／『山田書店新収目録』81(2008春)／『菅楯彦没後五十年展』図録(鳥取県立博物館 2014)(樋口)

菅野庄太郎 (すがの・しょうたろう)

新しいエッチング教育の発展のために、福島県の須賀川第一小学校においてエッチング講習会(1937.4.24・25 講師:西田武雄)が開催された。当時、須賀川第一小学

校高等科2年生だった菅野はこの講習会に参加し、制作した作品が西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第55号(1937.5)に掲載されている。【文献】『エッチング』55(加治)

菅藤霞仙(すがとう・かせん) 1889～1955

1889(明治22)年4月28日広島県世羅郡津村に生まれる。本名は仙右衛門。霞仙と号する。学歴は不明であるが、昭和初期に神戸市内の中学校で美術を教えたという。1927年に神戸美術協会の「県展」委員を務め、翌1928年には第6回春陽会展に油彩画《雪霽》が初入選している。その頃から、版画も手掛け、1929年に川西英・北村今三・春村ただを・福井市郎と「三紅会」を神戸で結成。同年の第1回展に《郊外風景》など3点、第2回展(1930)に《静物》など5点、第3回展(1931)に《髪A》《髪B》など7点を出品した後、退会。続いて、日本版画協会展に出品し、1932年の第2回展に《月光》が初入選。その後も第4回展(1935)に《神戸港》、第5回展(1936)に《明石城趾》、第6回展(1937)に《橋》、第7回展(1938)に《筏》を連続して出品した。またその間、神戸の『HANGA』第15輯(1930.3)に《郊外風景》、東京の『版芸術』第19号(1933.10)に表紙絵《阿茶さん》、第21号(1933.12)に年賀状、第26号(1934.5)に蔵書票《船》《裸婦》、長野県須坂の『櫟』第10輯(1936.7)に《裸婦》を発表したほか、1936年に開催された第2回神戸コドモ夏期講習会「絵を習う会」で川西英とともに版画の講師を務め、同年刊行された『児童百科大辞典』第22巻 美術教育篇(玉川学園)の「版画」の項目も執筆したという。また一方では、油彩画を国画会展に発表し、1935年の第10回展に《田園風景》《神戸風景》《家》、第11回展(1936)に《田園風景》、第12回展(1937)に《酒樽のある風景》が入選している。終戦直後の1945年9月、家族とともに広島に帰郷。翌年から世羅郡世羅西町の小学校分校で美術の講師を務めた。1955(昭和30)年の第23回日本版画協会展に《雪の朝》を再び出品するも、同年12月17日広島市で交通事故に遭い逝去。【文献】金井紀子編「第3章 菅藤霞仙」『菅藤霞仙 年譜』『川西英と神戸の版画—三紅会に集まった人々』展図録(神戸市立小磯良平記念美術館 1999)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

菅原寿郎(すがわら・としろう)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に在学中、同校生徒が発行していた版画誌『刀』第13輯(1932)に《静物》を発表。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

杉浦新七(すぎうら・しんしち)

版木会発行の創作版画集『版』第2輯(1937.2)は「竹に寒雀」特集でありそこに2点、そして第5～7・10～12輯(1937.5～1938.1)に各1点の木版画を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や版画の題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。なお、『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認であり、目次等に作者名はあるが、作品名は記載されていない。【文献】『版』2・5～7・10～12(加治)

杉浦反三郎(すぎうら・はんざぶろう)

版木会発行の創作版画集『版』第7輯(1937.7)に木版画1点を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や版画の題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。なお、『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認であり、目次等に作者名はあるが作品名は記載されていない。【文献】『版』7(加治)

杉浦非水(すぎうら・ひすい) 1876～1965

日本の代表的な図案家、図案教育者。石版ポスター、雑誌表紙や口絵、装幀などの図案家、図案教師として知られ、また光風会の画家としても知られている。1876(明治9)年5月15日愛媛県松山に生まれる。父は白石朝忠、母レイの長男。本名は朝武(つとむ)。幼名は一雄。1886年白石家から離籍し、母の実家にあたる杉浦家・杉浦祐明の養子となる。1891年松山尋常中学校に入学。1892年地元の四條派・松浦巖暉に学ぶ。1894年に同校を卒業。1897年上京し川端玉章(天真画塾)に入門、9月には東京美術学校日本画科選科に入学。1898年合田清を介して黒田清輝の知遇を得る。1901年同校日本画科選科卒業。1902年大阪に新設の三和印刷の図案部主任。1905年上京し中央新聞社に入社。1910年三越呉服店図案部主任。1912年「書籍装幀雑誌表紙図案展覧会」を日比谷図書館階下で開催。同年光風会創立に参加。1922年渡欧、1924年帰国し、1925年七人社結成。1927年ポスター研究雑誌『アフィッシュ』創刊。1929年開校の帝国美術学校図案科長。1935年多摩美術学校創設にかかわり校長就任。1955年第11回日本芸術院恩賜賞受賞。1965(昭和40)年8月18日逝去。妻はアララギ派歌人の杉浦翠子。明治30年代から大正・昭和に至る多くの雑誌の表紙絵・口絵・挿絵・ポスター制作に携わった。アールヌーボー、アールデコの日本での導入表現者として知られる。木版多色摺・石版・オフセットなど各時代の印刷の特徴をよく掴んだ図版が多い。また、市販の図案絵葉書も制作。主な図案集としては、『非水図案集』第一輯(金尾文淵堂 1915 玻璃版・木版・凸木版色刷・石版・オフセット)、『非水花鳥図案集』(平安堂書店 1917)、『非水月刊図案集』(金尾文淵堂 1918)、大正版『非水百花譜』(春陽堂 1920～1922 全20輯 100点制作)、『非水一般応用図案集』(平安堂書店 1921)、『非水創作図案集』(文雅堂 1926 関東大震災で版木消失のため新たに彫り摺り直した)、再刊昭和版『非水百花譜』(春陽堂 1929～1934 全20輯 100点制作)など多い。【文献】前村文雄編「略年譜」『杉浦非水の眼と手』展図録(宇都宮美術館 2009)(岩切)

杉坂鐘吉(すぎさか・かねきち)

多田北鳥が1929年に藤沢龍雄・吉邨二郎らとともに「大衆のための美術の発展」を目指して結成した「実用版画美術協会」(作家と印刷者の協同団体)の作家側同人。同団体は、1929年「実用版画美術展」(12.7～12 上野・松坂屋)を開催。ポスター・雑誌・装丁・その他各種版画形式による実用版画を陳列し、杉坂も名を連ねるが、詳細は不明。【文献】『美術新論』5-1(1930.1)(樋口)

杉田千代乃(すぎた・ちよの) 生年不明～1991

東京の文化学院専修科は1933年4月から石版や肖像画等の講習会を始める。エッチングについては日本エッチ

ング研究所の西田武雄を講師に招いて、第1回を10月に1週間、そして第2回を11月20～25日に開催した。在学中の杉田はそのうちの第2回目の講習会に参加。制作した作品が西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第14号(1933.12)に掲載されていて、その図柄は無線機器の前にいる杉田自身である。1932年、アマチュア無線家の兄が急逝した後、兄のハム仲間にも助けられて国家試験に合格し、1933年10月日本で最初の女性アマチュア無線家として開局。その時の写真をそのままエッチングの題材にしたもの。結婚して鈴木姓となり、戦後再び開局し、JH1WKSで活躍。1991(平成3)年5月20日逝去。【文献】『エッチング』12・14 / 「関東のハム達 庄野さんとその歴史(9)」(インターネット検索)(加治)

杉溪言長(すぎたに・ときなが) 1865～1944

慶応元(1865)年5月13日(新暦6月6日)京都に生まれる。伯爵山科言繩の三男で本名は山科言長。六橋(ろっきょう)と号す。5歳の時から「杉溪」姓を名のる。画を重春塘に学ぶ。20歳の時に男爵を授けられ、26歳より30余年貴族院議員を務めた。1944(昭和19)年10月30日逝去。赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921)に『雪裡の別荘』1図を制作。【文献】『山田書店新収目録』81(2008春) / 「美術人名辞典 Weblio 辞書」(2016.1.2)(樋口)

杉林古香(すぎばやし・ここう) 1881～1913

1881(明治14)年6月24日、蒔絵師・二代浅野友七の四男として京都に生まれる。本名は浅野喜次郎、古香と号す。1895年京都市立美術工芸学校漆工科(後に描金科と改称)に入学。入学以前から漆器制作や図案研究などを行っており、在学中より京都美術協会展などに出品し受賞を重ねる。1900年同校卒業後、上京して川之辺一朝(帝室技芸員・東京美術学校教授)の弟子となるが、短期間で京都に戻り家業を手伝う。1904年西川一草亭(生花去風流七代家元・津田清楓の実兄)・津田青楓(洋画・日本画家)と3人で図案研究の目的で「小美術会」を結成し、図案雑誌『小美術』(木版摺の図案を掲載)を芸艸堂より刊行(1904.4)、同号を浅井忠に献呈して知遇を得る。その後、浅井忠・谷口香嶠を同誌の顧問に迎え、作品評などを掲載して評判となるが、津田青楓が日露戦争の兵役で離れたこともあって第6号(1904.3)で廃刊となる。1906年浅野古香らが中心になって浅井忠・神坂雪佳らを迎えて漆芸家と図案家の図案研究会「京漆園」を結成し、浅井忠・神坂雪佳・谷口香嶠らから図案の指導を受ける。伝統的な蒔絵師の家から離れ自由な制作を求めて1907年杉林トモと結婚。杉林家の養子となり、以降は杉林姓を名のって浅井の図案を基に多くの漆器を制作し関西美術会展工芸の部などに出品するが、1913(大正2)年7月28日、32歳の若さで急逝した。版画は、『繙とかすり』後編上・下(芸艸堂 1905)や『さらさ集』上・下(芸艸堂 1906)などの木版図案集、浅井や自らの図案を基に制作の漆作品をまとめた『古香作品集』1・2(芸艸堂 1906・7)、浅井らと合作の扇面木版画集『どうか会』(芸艸堂 1907)に木版1図などの制作がある。(なお、『誌上のユートピア』展図録(神奈川県立近代美術館 2008)に紹介されている津田青楓・西川一草亭・杉林古香『小美術画譜』(芸艸堂 1907頃 24×35.6cm)は、『小美術』第1巻第1号～第1巻第6号(1904.4～1904.12)の図版を集めて刊行されたものと推測するが、未見のため、確

認できていない)【文献】『山田書店新収目録』35(1998.12) / 『浅井忠の図案』展目録(愛媛県立美術館・佐倉市美術館 2002) / 『誌上のユートピア』展図録(神奈川県立近代美術館 2008)(樋口)

杉原武夫(すぎはら・たけお)

佐賀県師範学校附属小学校教諭の山口亮一・山口孝行が中心となって西田武雄らを招いて開催された第2回佐賀市エッチング講習会(1937.7.27)に参加する。当時、三養基中学校に勤務。武藤完一コレクションに、エッチング《[室内風景]》(T.sugiharaのサイン)がある。【文献】『エッチング』47・58・59(樋口)

杉原董三(すぎはら・とうぞう)

1928～31年にかけて甲府で版画と文芸の研究雑誌『線 SEN』(全5冊)を秋山喜久三・竹村節之助の3人で発行する。杉原は全5号の表紙絵(版画)を担当した。第1巻1号(1928.7)に『冬日鉄橋之図』《丘の町》《トンネル風景》、第1巻2号(1928.10)に『卓上静物』《風の吹く日》《花とパイプ》、第2巻3号(1929.4)に『魚と時計』《蝗》《雪の町》《K 刑務所附近》、第3巻4号(1930.1)に『酒場』《風景》《静物》《御嶽風景1(覚円峯)》《高原風景》、第4巻5号(1931.1)に『嵯崎風景』《構内労働》《風景》を発表。杉原は俳句も嗜んでいたようで、版画のほか、第1巻2号に俳句と第2巻3号には「光の祀祭」と題してルノアールの評伝も寄稿している。『線 SEN』は内容構成や表紙の図柄などをみると、当時、東京で発行されていた澤田伊四郎主宰の版画と詩の雑誌『風』(『風』発行所)の影響が感じられ、高村光太郎も詩「激動するもの」(第3巻4号)を、第4巻5号には「自刻木版の魅了」という小文を寄稿していることから、中央版画界との交流も行われていたと考えられる。1937年創立の第1回山梨美術協会展に会友(洋画)で出品し、翌年の第2回展(1938.11.2～6 松林軒)で会員に推挙とされる。【文献】『創作版画誌の系譜』 / 「山梨美術協会75周年記念誌」(インターネット検索)(加治)

杉原正巳(すぎはら・まさみ) 1913～1946

1913(大正2)年1月静岡県富士郡原田村に生まれる。旧姓は石川。1931年静岡県立富士中学校を卒業。1933年東京美術学校油画科予科に入学し、校友会の舞台芸術部に所属。同級生に石原壽一・加藤太郎・杉全直・萩原英雄らがいるが、特に加藤と深く交友した。在学中に「杉原」と改姓。1934年本科に進み、南薫造教室に学ぶ。また同年、石原壽市・萩原英雄と「版画研究会」を結成するも、作品研究のみで制作はしなかったようである。1936年校内の臨時版画教室で平塚運一に木版画を学び、翌年の第12回国画会展に『電車の中』《習作室》、第6回日本版画協会展に『進軍の歌(1)』《進軍の歌(2)》《進軍の歌(3)》がそれぞれ初入選。また、石原壽市・山口寅尾・杉原正巳 版画浮彫展(6.5～7、10.1～4 新宿・天城画廊)を開催し、木版画を出品した。さらに同年(1938)、石原・加藤・杉全らとシュールレアリスム傾向のグループ「貌」を結成。1939年にかけて4回の展覧会を開催し、同人誌『JEUX D'ESTRIT』(1938.4～1939.4 8冊か)を発行。同誌に版画も発表した。1938年東京美術学校油画科を卒業。1939年の第9回独立展に油彩画《パン喰ひ競争》、第14回国画会展に木版画《僧舞見物人》が入選。同年4月から1942年5月まで現役応召され、ハルビン・上海など

を転々とする。除隊後は出征中だった加藤のアトリエ（世田谷代田）に杉全と住む。1942年の第11回日本版画協会展に《子供》《満洲風景（ハルピン）》《満洲風景（石河）》《馬》を出品。翌年会員に推挙された。1944年には恩地孝四郎の主宰する版画研究会「一木会」に病を得て除隊してきた加藤と参加（一説では1939年頃）。『一木集I』（1944）に《馬鈴薯の花》を発表。同年の第13回日本版画協会展に《藤の花》《藪の花》《愛鷹山麓の麦踏》《大東亜会議代表肖像画（Subbas Chandra Bose）》と慰問作品を出品。また、加藤と木版画集『版画集』（私家版 各10点）をまとめた。その間、1943年の第4回美術文化協会展にも油彩画《ヒバ》《ナギ》《桜》《無花果》を出品。同人に推挙され、翌年の第5回展にも《斉唱（岳麓道場）》を出品した。また、1945年陸軍美術展に油彩画《整備完了》を出品している。戦後の消息については、1946（昭和21）年2月の『日本版画協会々報』には「応召中発病、郷里にありて療養中」と伝えられたが、同年6月14日静岡県富士郡原田村の実家で死去。翌1947年の日本版画協会第15回展に遺作《野馬》《ハルピンの街景》《支那の子供》《植物連作》9点、計12点が並ぶ。また、1950年には恩地孝四郎・山口源・関野準一郎・加藤との共著『一木会豆版画帖 博物譜』（恩地編 青園荘 250部限定）が出版された。5人が5つのテーマを分担し、「艸」をテーマとした杉原の木版画5点も収められているが、同書は早世した加藤と杉原に捧げられたものでもあった。【文献】『日本版画協会々報』36／『一木会豆版画帖 博物譜』（青園荘 1950）／『グループく貌>とその時代』展図録（郡山市立美術館 2000）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

杉本こせい（すぎもと・こせい）

杉本義夫夫人。1932（昭和7）年に夫の杉本義夫が、奥田香苗・新田穰らと和歌山県新宮で結成した「熊野きつつき会」の会員で、同会の第1回展（5.19～21）に「漫彫」と称する木版画《自像》《右京さん》《新田君》《奥田君》《三好五老兄》を出品した。【文献】『第一回版画展覧会出品目録』（熊野きつつき会 1932）（三木）

杉本義夫（すぎもと・よしお）1905～2001

1905（明治38）年1月9日和歌山県新宮町に生まれる。父・喜代松（1873～1955）は同地で屈指の木材商を営み、戦前は新宮町長・和歌山県木材同業組合連合会初代会長、戦後は新宮市長などを歴任した人物である。1922年に新宮中学を卒業し、中央大学に学ぶも中退したという。その後は家業の材木商を手伝う傍ら、1929年頃より中学時代の同級生である新田穰と版画の研究を始め、1932年に「熊野きつつき会」を結成。5月の第1回展に《老婆》《海女A》《玩具》など26点を出品。続く6月の第2回日本版画協会展にも《熊野川風景》《静物》《野菜》が入選。さらに9月頃までに小野忠重らの「新版画集団」に参加した。新版画集団では、1933年3月の第2回展に《風景A》《風景B》、7月の岐阜展に《静物》、1934年6月の第1回版画アンデパンダン展に《紀伊風景》を出品したが、その直後に退団したようである。その間、1933年10月には和歌山県の紀南地方の美術家たちを結集した「全熊野美術協会」（後に「熊野美術協会」と改称）の結成に尽力。「洋画部」「版画部」「光画部」を持つ当時の地方展としては珍しい総合展を開催した。第1回展の目録は不明であるが、1934年の第2回展（5.11～14 新宮公民館）に《葱坊主》《月

夜》《リラ人形》など9点を出品。以後、1942年頃まで毎年展覧会を開催し、版画部の会員として活動した。戦後は1947年の「全熊野美術協会展」の再開、1952年からの新宮市展の開催、1968年の「熊野美術協会」の再建（市展開催のために一時解散していた）などに貢献。自ら市展の審査員を務めたこともあったが、次第に創作からは身を引き、小学校時代の同級生である洋画家の村井正誠や、新宮出身の佐藤春夫・西村伊作などとも交友し、地方文化の応援者として紀南地方の文化の育成に尽くした。2001（平成13）年8月17日新宮市で死去。【文献】『和歌山の作家と県内洋画壇展 1912～1945』図録（和歌山県立近代美術館 1984）／『熊野美術協会 第30回記念特輯号』（1978）（三木）

杉山祥司（すぎやま・しょうじ）

日本エッチング研究所主宰の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森・北陸などを回ったが、8月12日は岐阜中学校でエッチング・木版画・素描の講習会（講師：西田武雄・武藤完一・小野忠重など）を開催。当時、岐阜市富田高等女学校に勤務していた杉山も参加し、その時の作品とみられるエッチングが研究所機関誌『エッチング』第70号（1938.8）に掲載されている。第71号（1938.9）には「エッチングを試みて」と題して制作の感想も寄せている。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70／『エッチング』69～71（加治）

杉山新樹（すぎやま・しんじゅ）1898～1974

1898（明治31）年愛知県碧海郡（現・岡崎市）矢作町に生まれる。県立第2中学校を経て、1923年に東京美術学校西洋画科を卒業。1925年洋行帰りの近藤孝太郎や同窓の山本敏太郎らと洋画の研究会「我々の会」を結成。新人育成に努め、翌1926年に第1回我々の会展（4.14～20 岡崎市立図書館）を開催し、特別出品として川上澄生・諏訪兼紀・平塚運一・深澤素一ら版画家の作品も展示した。この頃、岡崎でも創作版画への関心が高まり、村松隆次や小野英一らは版画誌『版画』（1925）を創刊する。その第2号（1925.5）に木版画《水浴》を発表。第3号からは近藤孝太郎が創刊した短歌の同人誌『草原』と合併し、『試作』（1925～1926）と改題。その第2巻3号（1926.7）に木版画《習作》2点を発表する。第13回展春台美術展覧会（1938.2.3～9 東京府美術館）に油彩画《婦女像》《京女像》、第14回展（1939.2.3～20 東京府美術館）に油彩画《上水塔の見える風景》《秋の庭》を出品。また、1940年の旺社社第8回展（3.5～25 東京府美術館）に油彩画《晩秋》《秋景》を出品する。1945年、北川民次の提唱により、「民主美術協会」の設立に参加。名古屋松坂屋百貨店において第1～4回展を開催するが、出品作品は不明。1962年まで愛知教育大学教授を務め、退官後も美術教育に貢献する。1974（昭和49）年2月16日に死去。1925年当時、愛知県碧海郡（現・岡崎市）矢作町西矢作に在住。【文献】『近藤孝太郎とその周囲』展図録（岡崎市美術館 1983）／愛知県美術館編『北川民次展』図録（北川民次展実行委員会 1996）／『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社 1997）／『創作版画誌の系譜』（加治）

杉山正義（すぎやま・まさよし）1906～没年不詳

1906（明治39）年静岡県銭座町に生まれる。生家は「釜

屋の膏葉で知られた家伝の妙薬を伝えていた」(中川雄太郎)という。メッキ工場に勤めながら木版画を手がけ、1929年の「童土社」の結成に参加。同年10月の第1回展に《燈台》を発表。以後、第2回展(1930)に《風景》《秋》など5点と油彩画《工場》、第3回展(1931)に《薄暮》《アンテナの見える風景》など5点、第4回展(1932)に《風景》5点と《鳳仙花》、第5回展(1933)に《雲と電柱》《露店》と装幀2点、第6回展(1934)に《海》《龍南風景》を出品。また、静岡で発行されていた創作版画誌への発表も多く、仲村岳(中村仲蔵)の『有加利樹』再刊2輯(1930.3)・3輯(1930.7)、栗山茂の『艸笛』第1号(1930.3)・3号(1930.8)、その統合誌である童土社の『ゆうかり』第1～15・16号(1931.1～1933.7)・22号(1934.10)・24号(1934.12)・26号(1935.3)・30号(1935.8)、中川雄太郎の『かけた壺』第17号(1933.12)・18号(1934)、浦田儀一・真澄忠夫らの『版画座』第15号(1934.3)に作品を寄せた。また、東京で発行していた料治熊太の『白と黒』第13～20号(1931.4～1932.1)・22号(1932.3)・23号(1932.4)・30号(1932.12)・31号(1933.1)と『版芸術』第1号(1932.4)・6号(1932.9)・9号(1932.12)にも作品を発表している。1935年の第7回童土社展は目録が無く、出品の有無は不明である。それ以後は出品しなかったようであるが、1939年までは同人として名を連ねている。その後は版画制作から離れ、「石楠」派の俳句に専念。俳号は「霧里」。1967年頃は静岡市小鹿に住む。【文献】『童土社展目録』／中川雄太郎『静岡県版画史話』(童芸工房 1967)／『静岡県版画協会第50回記念版画集—県版画50年の歩み—』(静岡県版画協会 1985)／『静岡の創作版画 昭和戦前・版画家たちの青春』展図録(静岡県立美術館 1991)／『創作版画誌の系譜』(三木)

杉山康児(すぎやま・やすじ)

1938(昭和13)年の造型版画協会第2回展に《街景》を出品。出品時は東京に住む。【文献】『造型版画協会第2回展目録』(三木)

鈴木昭雄(すずき・あきお)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)3年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)を5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940～1941)として創刊する。その第3号(1941)に《秋》を発表。【文献】『創作版画の川上澄生』(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

鈴木卯三郎(すずきうさぶろう)

1929(昭和4)に朝鮮芸術社第1回展(旧京城 来青閣)に出品。同年「朝鮮創作版画協会」を多田敦三らと結成し、事務所は朝鮮芸術社内に置く。翌年1月に版画同人誌『すり絵』を発行し、創刊号に木版画《風景》を発表したが、この作品は、前年の朝鮮芸術社第1回展に出品したものである。その他の活動については不明。【文献】『創作版画誌の系譜』／辻千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開」『名古屋大学博物館報告』30(2015)(河野)

鈴木悞水(すずき・かすい)

木版画《品川台場古町》《暮れゆく千住大橋》(限定100 13.7×19.5 cm)を制作。作品の形状から、1916(大正5)年頃に制作の「東京風景版画シリーズ」〔仮題〕の

中の一枚か。【文献】『山田書店新収目録』58(2003冬)／『版画堂』目録106(2014.12)(樋口)

鈴木華邨(すずき・かそん) 1860～1919

万延元(1860)年2月7日東京下谷池之端茅町に生まれる。父清次郎、母もとの長男。本名は惣太郎。1874年(菊池齋門下高弟)中島亭齋に学び、のちに菊池齋のもとに就き「華邨」の号を受ける。四條派花鳥画も模範とし自らの長所とする。1876年勤業寮編輯係に勤務。この頃には起立工商会社図案係でも働く。1877年内国勤業博覧会で花紋賞メダル受賞。1889年石川県立工業学校教授(絵画と図案意匠)として赴任。1898年日本美術院創立には正員に列し、「花鳥画の華邨」として知られるようになった。日本美術協会・国画玉成会・美術研精会・巽画会に会員として参加。1907年文展第1回では《平和》が三等賞、1909年文展第3回《秋風》で褒章。1910年の日英博覧会では《雨中渡舟五図》で金牌受賞。以降も代表的公募展で入賞。日本画壇の担い手であった。1919(大正8)年1月3日雑司ヶ谷白邸で逝去。墓所は港区三田・宝生院。出版物では『日清戦争絵巻』(春陽堂 1894～1896 9冊)。『美術世界』『都の花』での挿絵。優美精緻な木版口絵は雑誌では『文芸倶楽部』など、単行本木版口絵では村井弦齋著春陽堂の『朝日桜』・『小説家』・『小弓御所』・『小説 日の出島』・『蓬萊の巻』・『風船縁』等、坪内逍遙『桐一葉』、泉鏡花『照葉狂言』、幸田露伴『天うつ浪』第三編等と多い。出版では主に春陽堂の関係が強い。【文献】『甦る 鈴木華邨展』図録(逸翁美術館 1991)(岩切)

鈴木錦泉(すずき・きんせん) 1867～1945

講談本の口絵(木版彩色)の多くを手がけ、主に関西で活動した画家。1867(慶応3)年、和歌山藩士の子として和歌山に生まれる。本名は爲之丞、または尚俊。和歌山で画家筑紫翠雲に南画を習い、号「雲溪」を受ける。独学で諸派の筆法を習い、版下絵を描き、落款「錦泉」を用いた。『神戸新聞』専属の挿絵画家だった一時期があった。業績の随一は数々の講談本口絵(木版多色)を手がけたこと。もう一つは、研究熱心で、有職故実を修得し絵画を描くにあたって時代考証の精度を上げた。1895年5月刊行の千早定朝編『倭のひかり 法隆寺宝物図録』(三冊・法隆寺蔵)の「縮図」を担当。1897年には各地に残る古い時代の模様をあつめた著書『古代模様 やまと錦』(辻本朔次郎発行)を発行といった出版がある。『此花』(1910.4.1)に掲載の「現今浮世絵師(4)」によれば、「師門 無」、「俗称 鈴木爲之丞」、「年齢四十四(慶応三年生)」、「生地 和歌山」、「現住 大阪市南区末吉橋通四丁目九番地」と紹介している。1945(昭和20)年逝去(月日は不明)。【文献】岩切信一郎「鈴木錦泉—明治講談本木版口絵随一の画家—」『一寸』48(2011.11)(岩切)

鈴木金平(すずき・きんぺい) 1896～1978

1896(明治29)年10月10日三重県四日市に生まれる。5歳の時に一家で上京し、父勤一郎は築地に薬屋を開店。1911年大倉中学校を中退して白馬会洋画研究所に入り、黒田清輝に師事する。同研究所で岸田劉生・曾宮一念・鈴木信太郎らと出会う。兄が岸田劉生と親しかったことから、誘われて1911年に岸田・川上涼花・川村信雄らの回覧雑誌『紫紅』(1907頃より刊行)に参加する。1912年のヒュウザン会結成にも参加し、同年第1回展に油彩画3点を出品する。1915年岡田虎二郎の静坐会で中村彝

と出会い、中村と行動をともにして太平洋画会展や帝展に出品する。1922年帝展に初入選、同年太平洋画会展で中村賞を受賞。1924年中村彝の逝去にあたっては、アトリエの遺品や遺稿の整理を行い、中村彝『芸術の無限感』(岩波書店 1926)、『中村彝画集』(中村彝刊行会 1926)の編集を担当する。1933年牧野虎雄を中心に旧槐樹社同人の上野山清貢らと旺玄社(後に「旺玄会」と改称)を設立。戦中の一時期を除いて晩年の1970年頃まで旺玄社(会)展に出品を続けた。油彩画の傍ら、伝統的な合羽摺技法を改良して独自の「金平式合羽摺」を創出する。1940年六潮會(木村莊八・牧野虎雄・中川紀元・山口蓬春・中村岳陵・福田平八郎)の創立十周年記念展で同人合作『東坡居士賞心余事抄冊』を合羽摺で複製したところ、同人たちが「かすみ版」と命名、以降金平の合羽摺は「かすみ版」(別名「金平版」と呼ばれるようになる。1942年第5回新文展に合羽刷『荒磯』が入選。「かすみ版」による〔複製〕版画には、梅原龍三郎《ヴァイオリンを弾く女》・安井曾太郎《紫金城》・福田平八郎《柿》・中村研一《二重橋》・伊原宇三郎《上野公園》・辻永《冬の東京港》・鈴木信太郎《濠端》・石井鶴三《銀座》・野口弥太郎《大川端》・中西利雄《東大秋景図》・木村莊八《三番叟》《暫》《鏡獅子》《矢の根》・牧野虎雄《水仙》《牡丹》《朝顔》《柿》などがある。いずれも「かすみ版普及会」(千代田区丸の内3-4 交通協力会内)より刊行。その他に『三岸好太郎画集 1902-1934』(美術出版社 1950)の図版《道化》などもかすみ版による。鈴木に合羽版についての教を乞うた関野準一郎は、『「本朝昔噺」〔武井武雄刊本・関野摺・1941〕の合羽版摺りでは、その摺匠、鈴木金平を訪ねて教を乞うた。鈴木金平は牧野虎雄の弟子で旺玄会会員の洋画家でもあったが、合羽版による絵の複製が仕事のようにであった。梅原龍三郎、中川一政、牧野虎雄の作品の、肉筆実物とみまちがう程精巧な合羽版による複製版画を作っていた』(『版画を築いた人々 自伝的日本近代版画史』)と証言する。1943年日本版画奉公会会員。1978(昭和53)年3月8日東京都豊島区で逝去。【文献】鈴木金平『かすみ版の話』『美術手帖』9(美術出版社 1948.9)／関野準一郎『版画を築いた人々 自伝的日本近代版画史』(美術出版社 1976)／滝谷彩子『鈴木金平画集』(三彩社 1990)(樋口)

鈴木賢二(すずき・けんじ) 1906～1987

1906年1月6日栃木市に生まれる。1924年に栃木県立栃木中学校を卒業し、川端画学校に学ぶ。1925年に東京美術学校彫刻科に入学、木彫を専攻する。同期には須山計一がいる。1927年の『プロレタリア芸術』2月号に漫画を発表。また、翌年5月の『戦旗』創刊号に扉絵と挿絵を描く。同年(1928)の第1回プロレタリア美術大展覽会に3点出品し、その内《九月の思いで》《「お土産は？」》の2点は撤回される。この頃より諸雑誌の表紙絵や漫画及び評論等の執筆が認められるようになる。また、同年には美術学校の校内で「軍事教練反対」のピラをまき退学となる。1929年「日本プロレタリア美術家同盟PP」が結成され、書記長となる。同年第2回プロレタリア美術大展覽会には彫刻《同志山本宣治》を含めて6点出品し、その内《サテ諸君今度は外敵だ》(漫画)が撤回となる。1930年第3回プロレタリア美術大展覽会には、第2回展出品の《同志山本宣治》が目録外出品される。1931年に日本プロレタリア美術家同盟は帝展に集団出品するが、帝展側にこれを拒否されたため、この責任を取って

書記長を辞任する。1932年頃から田原満の名前で『東京パック』に漫画を描く。1933年に栃木に帰郷。翌年「下都賀工芸同好会」を組織する。1936年の第三部会(彫刻)第2回展に《農婦習作》を出品、翌1937年の第3回で特選となる。この年銅版画家三木辰夫に日本エッチング研究所所長の西田武雄を紹介される。その後、同研究所からエッチングプレス機を購入し、銅版画を試みるが上手く行かず、西田の口添えもあって、1937年に銅版画講習会を自宅で開催することになる。講師に西田武雄を迎え、参加者は太田耕士・内田進久らであった。1938年の第4回第三部会展には彫刻《土》(三部作)を出品。また、同年に朝鮮、中国東北部を旅行し、合羽版で版画集『満州商売往来』を制作する。鈴木は版画制作は1930年代初年に始まり、この1938年頃から本格化したものと考えられる。またこの年(1938)には栃木市に「芸術懇話会」を組織している。翌1939年の第5回第三部会展に出品し、会員に推挙される。以後、第三部会は「国風彫塑会」と改称されるが、出品は続ける。また、1940年の第4回造形版画協会展にも出品した。戦後は、1946年の「日本美術会」の結成に参加し、常任委員となる。次いで久保貞次郎・新居広治らと「日本美術会北関東支部」を結成。また、産別会議美術部顧問となり、機関誌『労働戦線』(後『労働新聞』と改題)にカットや漫画を描き、職場美術サークルの指導をする。1947年には飯野農夫也・滝平二郎と「刻画会」結成し、機関誌『刻画』を発行。また、新居広治・丸木位里・赤松俊らと「前衛美術協会」を結成する。同1947年、中日文化研究所主催、造形版画協会・奥久慈版画会などの共催で、魯迅先生逝去11周年「全日本新木刻運動会議」が茨城県大子町で開催され、同時に大子小学校で「木刻まつり」が行われたが、小野忠重・飯野農夫也と実技指導を行った。1949年に上野誠・滝平二郎らによって「日本版画運動協会」が発足し、機関誌『版画運動』が創刊され、その1号表紙を木版《老農夫》で飾る。翌1950年の第3回日本アンデパンダン展に版画5点を出品。以後、同展に作品を出品し続ける。1954年に益子に移住し、彫塑の研究、版画制作(益子で働く陶工らを描いた版画《ひとシリーズ》などがある)、郷土玩具の制作などを行う。1958年には小野忠重・中山正・滝平二郎らと「集団・版」を立ち上げ、翌年に第1回展を開催する。また、同年の第4回原水爆禁止世界大会の会場に版画絵巻《平和を世界に》を飾り注目された。1960年に上京。翌年には日ソ協会の協力を得て、ソビエト巡回の現代日本版画展を開催。版画《みぞれ》他2点を出品し、小野忠重と訪ソする。1962年日本ブルガリア友好協会理事になり、翌1963年にはキューバ友好協会、インドネシア文化協会の理事に就任する。1964年日中画交流展(主催:朝日新聞社)に出品するが、その後体調を崩し帰郷。1974年に画業に復帰し、晩年はボールペンによる緻細なスケッチを描いた。1987(昭和62)年11月15日栃木市で逝去。【文献】鈴木賢二「西田先生をお迎へして」(『エッチング』61)／鈴木賢二「鮮満片々」『エッチング』78)／岡本唐貴・松山文雄『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967)／『野に叫ぶ人々 北関東の戦後版画運動』展図録(栃木県立美術館 2000)／『昭和期美術展覧会出品目録』(東京国立文化財研究所 2006)／竹山博彦・飯田晶夫編『生誕100年記念 鈴木賢二作品集-時代を彫刻む-』(鈴木賢二版画館 2007)(河野)

鈴木茂彌 (すずき・しげや)

慶應義塾普通部4年に在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第73号(1938.11)に外国と思われる街を描いたエッチング作品を発表。同校にはエッチング教育に熱心な教師仙波均平がおり、毎年美術部生徒作品展が同校の教室で開催されていた。1938年は11月6・7日の両日に開かれ、エッチング作品約100点が展示された(『エッチング』72 1938.10)。鈴木作品もその中の1枚と考えられる。【文献】『エッチング』72・73(加治)

鈴木 繁 (すずき・しげ)

東京女子高等師範学校1年に在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第10号(1933.8)にエッチング作品が掲載される。【文献】『エッチング』10(加治)

鈴木昭五 (すずき・しょうご)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)3年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)を5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940～1941)として創刊する。その第4号(1941)に《橋畔》、第5号(1941)に《百合》を発表。【文献】『創作版画の川上澄生』(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

鈴木信太郎 (すずき・しんたろう) 1895～1989

1895(明治38)年8月16日東京八王子に生糸業を営む商家の次男として生まれる。幼少期に腰椎麻痺の病気で杖や車椅子の生活を余儀なくされる。織物图案家にさせたい両親の希望もあって1910年15歳で白馬会洋画研究所に入所。鈴木金平と親しくなり、金平を通して岸田劉生を知る。この頃、雑誌『文章世界』『中学世界』『層雲』などにコマ絵を投稿し度々掲載される。1912年八王子の実家に戻り、府立織染学校(現・八王子工業高校)に2年間学んだ後、織物图案家の滝沢邦行の内弟子となって图案家を目指す。この間独学で水彩・油彩画の制作を続け、1916年第4回光風会展・第10回文展にいずれも水彩画が入選。その後も光風会展・文展・日本水彩画会展に出品し入選を続けるが、二科展では第1回展より落選を繰り返す。1922年第9回展に出品した油彩画《花と桃》で漸く初入選を果す。1924年第11回展以降は二科展でも連続して入選。1926年橋牛賞を受賞して会友となり、图案家から画家へと転じる。1936年二科会員に推挙され、戦後も二科会員として活動するが、1955年野間仁根・高岡徳太郎とともに二科会を脱会して「一陽会」を設立、以降は晩年まで一陽会に出品を続けた。車椅子や坐った状態で制作することから、低い視点で描く風景画は独特で、鮮やかな色彩と親しみのある画風で知られる。本業以外にも『三田文学』の表紙絵や雑誌『若草』『苦楽』などの挿絵、尾崎士郎をはじめとする200冊を超える装幀の仕事など幅広い活躍をみせ、大衆に親しまれた。1950年武蔵野美術学校(現・武蔵野美術大学)教授、1953年多摩美術大学教授に就任、1969年日本芸術院会員となる。1989(平成元)年5月13日逝去。

戦前の版画制作は、文芸雑誌『文章世界』第8巻第6号(1913.5)に木版挿画《窓のをんな》、俳句雑誌『層雲』第3巻第7号(1913.10)に木版挿画《無題》、詩と版画建艦献金作品集集成「大東亜の花ごよみ」第3集(詩・千

家元麿 1943 版画倶楽部)に木版《紫陽花》などごく僅かしかない。戦後は、《半蔵門ヨリ三宅坂ヲ望ム》(1946限100)・『人形版画集』(加藤版画研究所 3枚組 1953頃)・《桜の園》ラネーフスカヤ夫人の東山千恵子(1957頃)・《阿蘭陀まんざい》(1960頃)・《バラ》(制作年不明)などの木版画や石版画集『民族衣装』(明治書房 1955～56 限定100)、1959年美術家会館建設資金のために制作されたリトグラフ作品、その他に鈴木金平の「かすみ版」による《濠端》(制作年不明)などがある。【文献】『加藤版画研究所四十余年作品の歩み』(加藤版画研究所 1975)／『近代日本版画体系』3(毎日新聞社 1976)／『知られざる刷り師 女屋勘左衛門と日本のパントゥル・グラビュールたち』展図録(目黒区美術館 1998)／寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現－『月映』誕生の背景を探る－」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所編 2005)／『山田書店(古書)新収目録』11・19・65・72(1988～2006)(樋口)

鈴木健夫 (すずき・たけお) ➡ 武田健夫 (たけだ・たけお)

鈴木亜夫 (すずき・つぎお) 1894～1984

1894(明治27)年3月26日大阪に生まれる。鉄道局勤務の父親の転任で5歳の時に上京。その後札幌、再び東京へと戻る。1912年芝中学校を卒業し、白馬会葵橋洋画研究所に通う。同期に中山巍・小島善太郎・前田寛治・田口省吾らがいた。1916年中山・前田・田口らと東京美術学校西洋画科に入学。在学中の1917年第2回二科展に初入選。1921年同校卒業後は、母校芝中学校(後に芝学園と改称)で図画教師を続けながら、円鳥会に所属。この間、中央美術展にも出品し、1922年油彩画《日傘をさす女》で中央美術賞を受賞。1929年に「[1930年協会]」に参加、新会員として第5回展(1930)に油彩画10点を出品するが、1930年の同会解散後は独立美術協会の創立会員として晩年まで出品を続けた。1984(昭和59)年12月7日逝去。版画の制作は、田口省吾の父親・田口鏡次郎(小説家・劇作家・美術評論家「洵江」と号す)が経営する中央美術学院発行の美術雑誌『中央美術』第12巻第3号(1929.2)の表紙絵に自画刻木版《裸婦》1図の制作がある。【文献】『中央美術』12.3／『鈴木亜夫画集』(鈴木亜夫画集刊行委員会 1972)(樋口)

鈴木利三 (すずき・としぞう)

静岡県下田の蓮台寺にあった旧制豆陽中学校の図画教員。画歴としては、1914年に静岡で開かれた第5回岳陽美術展(10.30～11.3 静岡市物産陳列所)に水彩画《河原木を拾ふ老女》を出品しているのが最初である。その後の動向は不明であるが、1930年の第11回帝展に木版画《浴後裸婦》が入選。翌1931年の第6回国画会展に油彩画《伊豆の小湾》と木版画《帰漁》[目録の版画の作者名は「風木利三」となっているが誤植]が入選している。また、第一美術協会(1929結成)にも版画を出品したようであるが未確認。中川雄太郎は『静岡県版画史話』の中で、「恐らく本県〔静岡県〕での版画制作のさきがけであったろう。所謂アマチュア版画を脱皮した内容と大きさがあった」[大正から昭和十年頃までの制作があった人と思われる。附近の風景などに優れた作品がある]と紹介している。【文献】『みづゑ』118／中川雄太郎『静岡県版画史話』(童芸工房 1967)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦

前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

鈴木敏之(すずき・としゆき)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)3年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)を5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940～1941)として再刊する。鈴木も参加し、その第4号(1941)に『ピエロ』、第5号(1941)に『漁村』を発表。【文献】『創作版画の川上澄生』(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

鈴木登三(すずき・とうぞう)

1934(昭和9)年に版画家武井武雄が全国の芸術家に呼びかけて始めた年賀状交換会「版交の会」(第3回からは「榛の会」と名称変更)に第2回(1936)から参加している。それ以前の鈴木は趣味人として名が知られており、自作の絵を木版印刷業者に作らせたり、専門の版画家に制作させた年賀状や蔵書票を使ったりしていた。「榛の会」は自画・自刻・自摺が原則だったので、入会することは自分で版画を制作することであり、自分の特徴や技法を確立して版画制作を続けていく事にも相当な覚悟と努力が必要だった。その後、様々な試みを追及し、結局第20回(1955)まで会員であり続けた。一方、蔵書票への興味から、自身蔵書票狂と名乗る青森の佐藤米次郎と知り合い、夢人社が発行した版画誌『陸奥駒』第18集蔵書票号(1935.7)に作品(自家用)を発表する。その後、同じく夢人社が発行した『サトー・ヨネジロー蔵書票集』[第2年]第3集秋の集(1935.10)に『鴻の巣天神』《城鴻》、第3年第2集夏の集(1936.8)に『金魚』の蔵書票を発表。それ以外にも『趣味の蔵書票集』(夢人社発行)第1回(1936.9)の『にはとり』を始め、第2回(1937.8)から第5回(1940.11)終刊号まで各回数点の蔵書票を発表。また、これも米次郎が中心となって発行した『月刊蔵票』(夢人社発行)第6号(1938.3)に『鈴木蔵票』を発表する。それらと並行して、青森以外の版画誌にも参加。東京の料治熊太が1937年頃に発行した『版画蔵票』第8号[1938.5]に自家用の蔵書票《鶏》を発表。長野県須坂の版画誌『樸』(信濃創作版画研究会発行)第10・11輯(1936.7・11)にも蔵書票各1点を発表。当時、佐藤米次郎は朝鮮仁川に渡っており、念願だった蔵書票展覧会(1941.10.16～19 京都市府・三越ホール)を開催する。鈴木の作品も展示されていて、展覧会は蔵書票だけではなく、平塚運一など現代版画家の小品版画展でもあった。なお、九州大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第24号(1941.12)の会員名簿には名前があるが、同誌には版画作品の掲載はない。当時は名古屋市中区長島4-4に在住。【文献】「会員名簿」『趣味の蔵書票集』1(夢人社 1936)／佐藤米次郎「蔵書票展覧会を終へて」『エッチング』108(1942.1)／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／市道和豊「趣味人からの脱却 鈴木登三」『奇跡の成立 榛の会昭和21年』(室町書房 2008)／『創作版画誌の系譜』(加治)

鈴木不二子(すずき・ふじこ)

1933(昭和8)年の第3回日本版画協会展に木版画《支那劇》が初入選。1935年の第4回展にも《支那服》が入選した。出品時は東京に住む。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

鈴木正治(すずき・まさはる) 1919～2008

1919(大正8)11月13日、青森市に生まれる。生家は棟方志功の実家に近く、幼少より棟方志功を知る。1932年県立弘前工業高校に入学し、美術教諭で院展院友の彫刻家・工藤繁造から絵画や彫刻を学ぶ。同校1年時に木彫《少年》を制作。4年時に第6回東奥美術展中学校彫塑部門で彫塑《冬》が初入選する。1938年同校卒業後は東京市陸軍造兵廠に就職し、1940年徴兵されて中国へ渡る。2年余の抑留生活を経て、1946年青森に帰郷。1947年より三沢米軍基地で働きながら、郡山三郎が主宰する中央美術学園の通信教育で油彩画を学び、1949年読売新聞社主催の「日本アンデパンダン展」(後に「読売アンデパンダン展」と改称)に第1回展から出品を続けるが、次第に油彩画から木彫・石彫へと関心が移る。独学で石彫を学び、1955年第7回展以降は主に彫刻を第13回展まで出品する。傍ら14年間在学した中央美術学園通信部を1961年に卒業、中央美術協会委員に選出され、以降協会運営に関わる。1966年工藤孝一・織田重信らと美術グループ「脈(バク)」を結成。1997年グループ「脈」が第5回青森県芸術文化奨励賞受賞を最後に解散するまでグループの中心として活動した。2008(平成20)年4月19日逝去。なお、『青森県近代版画の歩み展』図録(青森県立郷土館1995)よれば、弘前工業高校時代(1933頃)に今純三の銅版画を観て、銅版画を試みていたらしい。但し作品は未見。戦後も油彩画・木彫制作の傍ら版画を制作し、1955年青森県立図書館での初個展に木彫20点・スタンドグラス5点・版画22点を出品。1966年以降も《13人の天使》《ねぶた》《金魚》《鬼》《死刑廃止論》などのエッチングや木版画《重箱》《角巻》《ねぶた・金太郎・桃太郎・浦島太郎》、その他に空刷りエンボッシング作品なども制作している。【文献】『青森県近代版画のあゆみ展』図録(青森県立郷土館1995)／工藤正義『鈴木正治の軌跡』(草雪舎2014)(樋口)

鈴木松三(すずき・まつぞう)

長野県下の教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《賀状》が掲載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

鈴木保徳(すずき・やすのり) 1891～1974

1891(明治24)年11月24日東京府荏原郡六郷村(現・東京都大田区東六郷)に生まれる。1908年白馬会美術研究所に通い、1909年東京美術学校西洋画科へ入学。在学中に小学校の同級生だった彫刻科の濱田三郎らとエッチングを試みる。1914年に東京美術学校を卒業。1921年に第8回二科展へ油彩画《初秋》を出品し、初入選。第9・13～17回展まで出品。その内の第15回展(1928)では《接木と花》《青嵐》などで二科賞を受賞。同会会友になるが、1930年に会友を辞退。同年11月には林武・児島善三郎らと二科会を脱退し、春陽会の三岸好太郎、国画会の高島達四郎らと一緒に、「独立美術協会」を設立。1931年1月の第1回展以来出品を重ねる。1956年にはヴェネツィア・ビエンナーレに出品。1954年から1966年まで多摩美術大学の教授を務め、1972年には紫綬褒章を受賞。独立美術協会編『独立美術』第8号(1933.7)に鈴木保徳特集号、1935年には『鈴木保徳画集』(美術工芸会)を上梓。また浜田広介編著『みつばちマーヤ』(講談社1954)など挿絵の仕事も行っている。1974(昭和49)年11月11日胃癌のため東京世田谷の自宅で逝去。版画については、

西田武雄主宰の『エッチング』第45号(1936.7)に「憧れのエッチング」と題して、東京美術学校在学中に欧州の美術雑誌を見て、フォーゲラーやホイッスラーなどのエッチングに憧れた時代を回想している。版画作品は未確認。【文献】『日本美術年鑑』昭和49・50年版(東京国立文化財研究所 1976) / 『鈴木保徳年譜』『三彩』第397号(1980.10) / 『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1997) / 『エッチング』45(加治)

鈴木善壽(すずき・よしとし)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)5年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)の再刊を意図して、5年生の鈴木善壽・小松行高らと共に版画誌『刀 再版』(1940～1941)を創刊する。鈴木は第1号に序を書き、版画は第1号(1940)に《豊作》、第2号(1940.10)に《無題》を発表。1941年3月に同校を卒業。【文献】『創作版画の川上澄生』(鹿沼市立川上澄生美術館 2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

須田國太郎(すだ・くにたろう) 1891～1961

1891年(明治24)6月6日京都市下京区(現・中京区)に生まれる。1910年9月第三高等学校一部丙類に入学、この頃から独学で油彩画を描き始めた。1913年京都帝国大学に入学し美学・美術史を学ぶ。1916年同大学大学院に進み、「絵画の理論と技巧」を研究テーマとした。1917年関西美術院に入学し、都鳥英喜・澤部清五郎についてデッサンを習う。1918年京都帝国大学大学院を退学、翌1919年には関西美術院も退学して外遊の途についた。マドリッドに居を置き、以後1923年に帰国するまでヨーロッパ各地を訪ねヴェネツィア派やスペインの巨匠等の作品の模写に励み絵画研究した。その間、滞欧中の児島虎次郎・黒田重太郎・里見勝蔵・川口軌外らと交友した。1925年より和歌山高等商業学校講師となり美術工芸史を担当する(1933年辞任)。1928年関西美術会展に滞欧作を出品する。1932年京都帝国大学文学部講師となる。またこの年、東京銀座の資生堂ギャラリーで最初の個展を開催し、《トマル全景》《マーヴィラ》などの滞欧作、および帰国後の作品全37点を出品して画壇にデビューした。1933年大阪・美術新論社画廊で個展を開催。以後、1944年に閉鎖されるまで1935～1937年・1939年・1941～1943年にこの画廊で個展を開催した。1934年京都帝国大学文学部講師を辞し制作に専念、この年独立美術協会会員に推挙され協会第4回展に16点を出品した。以後、会員として出品を続け、独立美術京都研究所の指導にもあたった。またこの年大礼記念京都美術館(現・京都市美術館)で個展を開催し、1914年以降の作品72点を出品した。東京銀座の日動画廊でも個展を開催。1935年、この年開設の京都市展に出品、以後も出品を続け、第4回展(1939)からは審査員も務めた。1936年8月、銅版画家の中井平三郎を中心に発足し、須田も会員だった京都エッチング協会が講師に西田武雄を迎えて関西小国民社で講習会を開催、参加する。《メガラのクローソのトルソ》ほかの銅版画を制作した。その後も中井が自宅を開放して開催した研究会に参加、エッチングを制作した。1940年資生堂ギャラリー開催の日本エッチング作家協会主催第1回日本エッチング展覧会に《習作》を出品した。戦後も独立美術協会、京都市主催美術展覧会(京展)に出品した。1947年日本芸術院会員となる。1950年京都市立美術大学

が開学し教授となり、1960年まで務めた。1956年第28回ヴェネツィア・ビエンナーレに出品した。1959年毎日新聞社から第10回毎日美術賞を受けた。1961(昭和36)年12月16日京都で逝去する。『近代絵画とレアリスム』(中央公論美術出版、1963年)など多数の著作がある。【文献】下山肇「須田国太郎の銅版画—その制作経緯、作風形成への寄与」『静岡県立美術館紀要』12(1997) / 『須田国太郎展 没後50年に顧みる』図録(神奈川県立近代美術館ほか編集・発行 2012)(滝沢)

須藤 淳(すどう・じゅん)

1932年8月、西田武雄主宰の日本エッチング研究所は、上野の東京美術学校において開催された日本水彩画会主催の夏期講習会参加者を対象に、夜間エッチング講習会を開催した。参加者は14名おり、須藤も参加。当時、東京市板橋区板橋町金井窪50に在住。その後、1937年11月には、後に版画家となる栃木の彫刻家鈴木賢二宅アトリエで開催されたエッチング講習会(11.13・14 講師：西田武雄・内田進久)に参加。受講者は須藤を含めて6名。須藤はその講習会について研究所機関誌『エッチング』第61号(1937.11)に寄稿している。当時、栃木第四尋常小学校に勤務。版画は未確認。【文献】「エッチング講習会員」『エッチング』1 / 鈴木賢二「西田先生をお迎へして」『エッチング』61(加治)

須藤武男(すどう・たけお)

青森師範学校4年生在学中の1932(昭和7)年、同校で開かれた「青師図画展」(11.4～6)に油彩画5点・水彩画8点・素描4点とともに版画《浪打校》を出品。戦後の青森県の版画教育に力のあった江渡益太郎と同級生で、校内の美術サークル「コバルト会」にも所属し、翌1933年の同会主催の図画展には油彩画を出品している。1934年同校を卒業した。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)(三木)

砂沢喜一郎(すなざわ・きいちろう)

1930(昭和5)年に開催された第3回プロレタリア美術大展覧会(11.25～12.14 上野・日本美術協会)に版画《赤色救援会》を出品。【文献】岡本唐貴・松山文雄編『日本プロレタリア美術史』(造型社 1967)(三木)

砂田喜世(すなだ・きよ)

1935年、砂田は北海道岩見沢高等女学校に在学しており、日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第39号(1936.1)にエッチング作品を発表。当時、同校ではエッチャーとして作品を制作していた阿部新一が教鞭を取っており、1935年8月17・18日の両日、講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招いて、教師と生徒を対象にエッチング講習会(『エッチング』35 1935.9)を開催。砂田はその講習会には不参加だったが、その後の授業でエッチング制作が取り上げられ、阿部が生徒の作品を『エッチング』に寄稿したのと考えられる。【文献】阿部新一「エッチングを教へて」『エッチング』38(1935.12) / 『エッチング』35・39(加治)

洲之内 徹(すのうち・とおる) 1913～1987

1913(大正2)1月17日愛媛県松山市大街道にて陶器店「からつや」を営む元太郎、節の長男として生まれる。両親は共に熱心なクリスチャンであった。1925年松山中

学(現・松山東高校)入学、中富正三(後の大友柳太郎)・石田哲大(後の波郷)らと同級。応援団に所属するがモネの画集を見て美術部へ移る。1930年東京美術学校に入学、西洋画科を希望したが親の反対にあい建築科への進学であった。翌年、プロレタリア美術家同盟に加入、学内に共産青年同盟の細胞を結成。1932年7月検挙、8月中頃釈放、郷里へ戻るが、9月には退学通告を受け同校中退となる。松山ではプロレタリア文化連盟愛媛支部を結成、日本農民組合(全国会議派)の運動に加わる。1933年9月松山にて逮捕、県内で二百数十人が一斉検挙され、その中心人物とみられ起訴される。翌年未決拘置のまま1年を過ごし、暮れに懲役2年執行猶予5年の判決を受け釈放、不本意ながらの「転向」であった。1936年出所後仲間と共に文芸・美術の活動を再開。同世代の美術家たちと「青年美術家集団」を結成、「反アカデミズム」を掲げ「愛媛美術工芸展」(後の愛媛県展)に対抗。木版画作品を出品しつつ地元新聞紙上にて論争を展開、同会のスポークスマンの役割を担う。さらにプロレタリア文化連盟に参加していた作家志望の若者を中心とした同人文芸雑誌『記録』(1936.8～1939.7 9号まで不定期に刊行)を出版。主に文芸評論や随筆を載せ、表紙・扉・カットには自作の木版画を使用。モチーフは人物が多く、母子像、半ズボン姿の少年や着物姿の少女、工具、労働者、パイプを銜えた男や歌う男たち、そして身近な草花、マッチやランプ、工場風景や機械などが、白と黒の絶妙なバランスで紙面に配置されている。1938年10月、司法保護観察所の斡旋で北支派遣軍嘱託宣撫班要員として大陸へ渡り、方面軍参謀本部の対共調査班に入り以後終戦まで宣撫情報収集に従事する。1945年終戦後、中国国民革命軍第2戦区政治部下将参議となり国民党(閻錫山軍)の組織にはいるが、半年ほどで辞職。翌年春に帰国、松山に戻る。1947年松山にて貸本屋、古本屋、汁粉屋などを営みつつ執筆活動を再開、小説「鷲」にて第1回横光利一賞候補、小説「雪」にて第2回横光利一賞候補、小説「藁の木の下」にて第23回上野芥川賞候補、さらに小説「砂」にて第24回下野芥川賞候補となる。1952年暮れに単身上京、大田区大森山王に住まう。その後小説・随筆・演劇脚本・放送シナリオ等の発表を続け、愛媛県民歌や母校松山東高校校歌の作詞等も行う。1958年雑誌出版を計画、『これくよん』を発行するも創刊号のみで潰れ、さらに短編映画プロダクション「凡プロ」を立ち上げるが一年持たずに潰れる。1959年作家田村泰次郎の始めた現代画廊に入社。1961年画廊の経営を引き継ぎ「萬鉄五郎展」で再開する。この年、小説「終わりの夏」で第46回芥川賞候補となり、同作は翌年NHK総合テレビにてドラマ化される。現代画廊(1959～1987)は300回近くの展覧会をおこなっているが、なかでも吉岡憲・巖光・佐藤溪・佐藤哲三・古茂田守介・宮崎丈二・萬鉄五郎ら異色画家の遺作展をはじめ、無名異色の新人の登竜門としても注目され続けた。版画では畦地梅太郎・飯野農夫也・井上員男・斎藤壽一・田中空音・林美紀子・柳本直・渡辺逸郎らの展示がなされている。1973年美術随筆集『絵のなかの散歩』(新潮社)刊行、反響は大きく翌年1月より『芸術新潮』に随筆「気まぐれ美術館」の連載が始まり、さらに11月からは『アルプ』(創文社)にも美術エッセイ「山のとびら」を連載する。「気まぐれ美術館」の連載では上野誠・小林朝治・加藤太郎・藤牧義夫などを取り上げ、富山の「売薬版画」や中国での版画運動への記述がみられる。特に藤牧義夫は幾度か採り上げ、連載の最後も藤牧の追

跡であった。1987(昭和62)10月28日逝去。没後、主な絵画コレクションは宮城県美術館に収蔵されるが、版画作品としては池田満寿夫・恩地孝四郎・谷中安規・浜田知明・藤牧義夫・萬鉄五郎などが含まれている。【文献】『気まぐれ美術館—洲之内徹と日本近代の美術』展図録(朝日新聞社 1997) / 『洲之内徹と現代画廊—昭和を生きた目と精神』展図録(宮城県立美術館 2013)(後藤)

住 友雄(すみ・ともお) 1911～2000

1911(明治44)年岐阜県高山町に生まれる。木版画は独学と思われるが、1938年頃に守洞春を中心に高山で創刊された創作版画誌『版々』の慰問号(1938)に《[雷神の図]》を発表。翌1939年の第3回造型版画協会展に《古き病院の裏》《飛驒の獅子舞》、第8回日本版画協会展に《瓦焼く窯》がそれぞれ初入選。以後、1940年の第15回国画会展に《宮川河畔の雪》、第9回日本版画協会展に《雪景》《晩秋》《乗鞍岳朝》、1941年の第5回造型版画協会展に《山と雲と》《雪の国分寺にて》、第10回日本版画協会展に《夕映》《連峯》、1942年の第20回春陽会展に《雪景》、第11回日本版画協会展に《宮川の秋》《見せ物小屋》をそれぞれ出品した。その後、1943年5月結成の日本版画奉公会に会員として参加(なお、住所は鈴木金平と同じ「豊島区長崎三ノ十二」と紹介されているが関係は不明)。同年6月には日本版画協会会員に推挙された。1944年1月の『日本版画協会会報』第36号には、「住友雄君は高山市出身今も同地にある。守洞春君と長い僚友。その作は詩味に富み、要約された所理も見事である」と紹介され、住所については「岐阜県益田郡下呂町湯島濃飛自動車会社内」と訂正されている。戦後は開拓地に入植したため、版画を断念したという。2000(平成12)年に逝去(生没年及び戦後の動向は、「輝開」主人・吉留直輝氏による)。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『造型版画協会第三回展目録』 / 『造型版画協会第三回展目録』 / 『エッチング』123 / 『日本版画協会会報』36 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

住谷磐根(すみや・いわね) 1902～1997

1902(明治35)年群馬県に生まれる。群馬県立多勢農林学校卒業。1920年高崎創画研究会第1回展に出品。1921年日本水彩画会展に入選後、上京、川端美術学校で油絵を学ぶ。1923年8月二科第10回展にイワノフ・スミヤヴィッチ名で応募した油彩画《工場に於ける愛の日課》(東京国立近代美術館蔵)が初入選するも、ロシア人であるがゆえに入選したと解釈し、自ら入選の撤回を申し入れて事務局に受理された。その後グループ「マヴォ」の村山知義や友人の矢橋公磨らと「二科落選移動展」を計画し、自作を事務局から引き取って示威行動を開始するも官憲の制止によって中止を余儀なくされ、桜の木の下に作品を並べるという野外展示を行った。この頃からマヴォの正式メンバーとなったと推定、同年11月に東京のカフェ・レストラン十数ヶ所で同時開催したマヴォ第2回展に出品した。1924年3月にカフェ・ダブルで開催の「意識的構成主義展覧会」(1人1週間ずつ開催の連鎖展)を開催した。同年4月帝都復興創案展に出品、また同じ月に群馬県前橋で戸田達雄との二人展を開催した。その翌5月、カフェ・ダブルでの展覧会に続いて東京小石川のカフェ・ランで「マヴォ意識的構成主義的連続展」と銘打つリレー形式の展覧会を開催した。この年7月創刊のマヴォ機関誌『マヴォ』に構成物の図版やリノカット、文字原稿、

パフォーマンスの写真などを掲載し、マヴォイストとして活発に活動した。リノカットは2号(1924.8)に《偶像の対立》、3号(1924.9)に《運動と機械の構成》(冊子によって違うリノカットが掲載)を掲載している。1925年4月中原実主宰の画廊九段で開催の第2回無選首都展に出品した。この年新興美術運動を盛り上げた三科が解散した後は1926年5月の単位三科の結成に参加し、1927年5月の三科形成芸術展覧会に出品した。その後は槐樹社展、1930年協会展などに出品した。戦時中は海軍従軍画家としても活躍した。著書に『布衣 インド・西南アジア紀行・絵と句』(内田老鶴圃新社 1970)『点描武蔵野』(武蔵野新聞社 1980)がある。1997(平成9)年逝去。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)(滝沢)

諏訪兼紀(すわ・かねのり) 1897～1932

1897(明治30)年鹿児島(一説に東京)に生まれる。早くに父と死別したため、幼児期を母と神戸で過ごす。1914年中学校を卒業し、上京。本郷洋画研究所に学び、藤島武二の指導を受ける。1915年頃は鹿児島に住み、同地で雑誌『こかげ』を創刊(『中央美術』1-1)。翌1916年1月には「萬年青水彩画会」(事務所:大阪市 平原美雄)の結成と機関誌『萬年青』(回覧誌 定員15名)の創刊に参加(『中央美術』2-2、『みづゑ』132)。また、7月頃に「鹿児島洋画研究会」の設立を準備したが、その住所は「鹿児島郡吉田村吉田尋常高等小学校内」とあり、小学校に勤めていた可能性もある(『中央美術』2-8)。1917年頃からはローマ字運動に関心を持った。版画は、1913年に初めての作品《ONNA》(木版・紙版併用)を制作したことがあり、その後も創作版画に関心を寄せていたが、1919年に大阪で開かれた第1回日本創作版画協会展(大阪展:5.1～8 大阪・三越)を見て、版画家を志したという。同年(1919)、鹿児島から神戸に戻り、「大和言葉のよみがえり」を提唱していた神戸の桜沢如一を知り、ローマ字文芸誌『YOMIGAERI』(1919.9～1922.12)の発行に力を貸し、版画による挿絵、詩などを発表。1921年の第3回国際版画展(ロスアンゼルス)に《姉と弟》《ある街》《下賀茂神社》、第3回日本創作版画協会展に《亡びゆく人々》が入選した。また、この年再上京し、深沢索一・平塚運一を知る。翌1922年4月第4回日本創作版画協会展に《熟める10月》、第3回中央美術展に油彩画《芍薬》が入選。その後、神戸に戻り、「YOMIGAERI NO IE」美術展の責任者となり、油彩画7点・版画6点を出品した。1923年の第5回日本創作版画協会展に《母と子》が入選。また、自選版画集『SUWA-KANENORI SURIE-AWASE』(神戸・三ノ宮 YOMIGAERI NO IE 1923.7)を刊行。翌1924年には神戸で創刊された創作版画誌『HANGA』(主宰:山口久吉)の第3輯(9.15)に《加茂の杜》を発表。以後、第6輯(1925.5.1)、第9・10輯合併号(1926.7.5)、第12輯(1927.10.20)、第14輯(1928.11.3)に作品を発表している。また、同年(1924)の詩と版画社主催第1回展(京都・丸山医院)に《丘の上》《本郷風景》を出品した。1925年には3度目の上京をし、資生堂に入り、意匠部でデザインを担当。その後、再び日本創作版画協会展に出品するようになり、1927年の第7回展に《室内》《四谷怪談ノ内「お岩」》《屋上風景》《かさね》、1928年の第8回展に《浅間山雪景》《蝶と花》《収穫》《椿》、1929年の第9回展に《霧の朝》《静物》《神戸山手風景》《鉄橋》を出品。1927年に会友、1928年には会員に推挙された。また、版画を受理するようになった1927

年の第8回帝展に《花と少女》、翌年の第9回展にも《花と蝶》が入選した。1928年恩地孝四郎ら7名と「卓上社」を結成。また、翌年には「卓上社」のメンバーと「創作版画倶楽部」(主宰:中島重太郎)の創立に参加。同倶楽部から頒布した『新東京百景創作版画』(1929.3～1932.3)のうち、《新橋演舞場》(1929)など12景を担当した。また、1929年には再刊『風』(主宰:澤田伊四郎)の同人となり、再刊第1号(4.1)に《鉄橋日のある風景》、第2号(5.1)に《日比谷小景》、第4号(9.1)に《柘榴》を発表している。1931年の「日本版画協会」設立には会員として参加。同年の第1回展に《千住風景》《サーカスの女と馬》《室内》を出品したが、1932(昭和7)年4月29日急性盲腸炎のため東京根岸の病院で逝去。5月に遺作展(16～18 資生堂ギャラリー)が開かれ、遺作版画35点と広告美術作品が並び、遺作集『小品六種 諏訪兼紀遺作小聚』(5.16 創作版画倶楽部)が刊行された。また、同年6月の第2回日本版画協会展にも遺作数点が特別陳列され、恩地孝四郎は『アトリエ』第9巻第7号(1932.7)に追悼文を寄せた。後年、恩地は諏訪の作品について、「東京に生れ幼時を神戸に送つたという彼は、その都会的な趣味と情懷をその作画に見せたこと謂れないことではない。藤島武二に学んだ画歴は彼の画の高雅な装飾的美質を育てたであろう。黒白版画の簡潔さを、優雅な情緒で整え、装飾風に構成された画面は清麗であつた」(『現代版画の芽生えとその成長 附、外国版画の発達と新しい傾向方向』『日本の現代版画』創元社 1953)と評している。【文献】萬木康博編『諏訪兼紀〔年譜〕』(平凡社 1978)／『諏訪文庫目録 前田文庫目録一付・東京都美術館蔵版画誌目録一』(東京都美術館 1988)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

諏訪多栄蔵(すわた・えいざう) 1911～1992

1911(明治44)年2月10日、東京日本橋に生まれる。1928年工学院(現・工学院大学)冶金学科卒業後、トキワ鉛工業に入社し、大阪に住む。登山用具専門店の草分け「好日山荘」の店主で登山家の西岡一雄らに誘われて登山を始める。登山家で、深田久弥などとともに日本におけるヒマラヤの研究者としても知られる。『穂高岳登攀ルート図集』(朋文堂 1949)、『アルピニスト入門』(三笠書房 1958)、『ヒマラヤ山河誌』(雁部貞雄・葉師義美編 ナカニシヤ出版 1994)など登山に関する著作も多い。1992(平成4)年5月5日逝去。版画は未見だが、銅版画家で当時大阪に在住の高羽敏が中心になって、西田武雄を囲んで開催された「エッチャーの小集」(1941.3.27 大阪「すし栄」)に、中井平三郎(京都)・武藤完一(大分)・今井退蔵(神戸)・横山信也(神戸)・西村貞(大阪)らとともに諏訪多も参加する。『エッチング』第104号(1941.9)に寄稿した「エッチングの窓」によると、西田武雄『エッチングの描き方』(木星社書院 1930)を読んで銅版画に関心をもち、エッチングを始めたという。「エッチングの小集」に参加した経緯は不明。【文献】『エッチング』100・104／武藤隼人『高羽敏「満州風景第一輯 哈爾濱点描」-制作1937をめぐって-』(私家版冊子 2015.6)／『ウィキペディア』(2016.2.24)(樋口)

【せ】

静 湖 (せいこ)

輸出用と思われる木版画《小鳥》《枝にとまる小鳥》(いずれも仮題 刊年不明)の制作がある。【文献】『2008 新春版画目録』(2008) (樋口)

成 昂 (せいこう)

大正期頃の輸出用と思われる短冊判の木版画《天津海岸朝の月》《町へ買い物》《桜狩》《猿回し》《藤棚》(いずれも仮題)などの制作があるが、詳細は不明。【文献】『寛堂目録』31 (1993 秋) (樋口)

青 々 (せいせい) ▶松瀬青々 (ますせ・せいせい)

清野 秋 (せいの・あき)

1930 年青森県西郡木造中学校 2 年生の時に同校教諭で銅版画家の川崎正人の指導を受ける。戦後、青森県西郡舞戸中学校において美術教育に版画を正式にとり入れ、版画普及に尽力する。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979) (樋口)

清宮質文 (せいみや・なおぶみ) 1917 ~ 1991

1917 (大正 6) 年 6 月 26 日東京府豊多摩郡内藤新宿北裏町に生まれる。父は洋画家・版画家の清宮彬。1935 年麻布中学校を卒業。同舟舎絵画研究所に学び、駒井哲郎と出会う。1937 年東京美術学校油画科予科に入学。藤島武二に師事し、4 年生からは田辺至教室で学ぶ。在学中、臨時版画教室の銅版部で田辺至・松田義之から指導を受け、制作を行ったものと考えられるが作品は未見。1942 年同校を卒業。長野県上田中学校の美術教師となるが、翌年辞任し、帰京。1944 年慶應義塾工業高校の美術教師となるも、応召により陸軍部隊に入る。1945 年の東京大空襲により自宅にあった一切の作品を焼失。戦後は、慶應義塾工業高校に復職するも、1949 年に退職。商業デザインの制作に従事するようになり、1951 年から翌年までデザイン会社に勤務。1953 年に東京美術学校の同級生たちと「ゲフの会」を結成。以後、1962 年の第 10 回展まで版画・水彩画・ガラス絵を出品。また、このグループ結成をきっかけに画業に専念し、本格的に木版画の制作を始めた。1954 年第 31 回春陽会展に《巫女》が初入選。1974 年の第 51 回展まで出品し、1956 年に準会員、翌 1957 年には会員に推挙された。1958 年に最初の個展(銀座・サエグサ)を開催。1960 年からは南天子画廊で個展を開催するようになり、以後、同画廊で新作を発表。また、1962 年の第 3 回東京国際版画ビエンナーレ展、1973 年の第 10 回リュブリアナ国際版画ビエンナーレなどに招待された。1977 年春陽会を退会。その後は無所属となり、個展を中心に作品を発表した。寡作であったが、その静謐で詩的な独自の作品世界は、高い評価を受けている。1991 (平成 3) 年 5 月 11 日東京都杉並区の山中病院で逝去。【文献】『日本現代版画清宮質文』(玲風書房 1992) / 『清宮質文全版画集』(玲風書房 2010) / 『日本美術年鑑』平成 4 年版 (東京国立文化財研究所 1993) (三木)

清宮憲靖 (せいみや・のりやす) ▶清宮 彬 (せいみや・ひとし)

1910 (明治 43) 年頃に溜池の白馬会洋画研究所に学ぶ岡本帰一や同じ建物の 1 階にあった生巧館木版部に籍を置く菊地武嗣らが集まって発行した創作版画誌『白

刀』〔準備号 1〕(発行日不明)に多色木版《Portrait de Rodin》、〔準備号 2〕(1910.2)に単色木版《真昼》を発表。準備号 2 では岡本・菊地とともに編輯者として名を連ね、住所は「麹町区 4 番丁六 高橋方」となっている。なお、同誌は 1910 年 11 月に第 1 号を発行しているが、この号には「清宮憲靖」の名前はなく、「清宮彬」の名前が登場するため、両者は同一人である可能性は極めて高い。また、『白刀』の仲間であった馬淵録太郎も自著『木口木版伝来と余談』の中で、〔準備号 1〕に収録されている 3 人の同人が写る写真(オフセット)と同じものを挿図(p.207)として使い、3 人の名前を「菊地武嗣、岡本帰一、清宮彬」と紹介しているの、「清宮憲靖」と「清宮彬」は同一人と判断しても良いだろう。【文献】馬淵録太郎『木口木版伝来と余談』(私家版 1985) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

清宮 彬 (せいみや・ひとし) 1886 ~ 1969

1886 (明治 19) 年 12 月 23 日広島に生まれる。長男は版画家清宮質文。東京府立第一中学校を卒業後、溜池の白馬会洋画研究所に学ぶ。同研究所で岡本帰一や岸田劉生を知る。1910 年 5 月の第 13 回白馬会展に油彩画《きのふの雪》を出品。また、岡本・岸田や生巧館木版部に籍を置く菊地武嗣・馬淵録太郎らが集まって発行した創作版画誌『白刀』の第 1 号(1910.11.18)に表紙絵や《風景》などを発表。また、その〔準備号 1〕(発行日不明)に多色木版《Portrait de Rodin》、〔準備号 2〕(1910.2)に単色木版《真昼》を発表した「清宮憲靖」も清宮本人である可能性が極めて高い。その後、1912 年の「ヒュウザン会」(翌年「フェウザン会」と改称)、1915 年の「草土社」の結成に参加。ヒュウザン会の第 1 回展(1912)に油彩画《静物》《自画像》《黒木帽子の自画像》、草土社の第 3 回展(1916)から第 9 回展(1922)に油彩画・素描を出品。また、『ヒュウザン』第 1 号(1912.11)、第 3 号(1913.2)と第 4 号(1913.3)の表紙絵、草土社の第 5 回展(1917.12)・第 7 回展(1919.12)のポスターなどに木版を用い、『現代の洋画』第 15 号(1913.6)に木版画技法を解説した「木版法」を寄稿している。またその間、1914 年の第 14 回巽会展に出品した油彩画で最高賞である二等賞を受賞した。1922 年に発表の拠点としていた「草土社」は自然解消したが、その後は本格的に木版画に取り組むようになった。1931 年の「日本版画協会」結成に際しては会員(常務委員)となり、同年の第 1 回展に《花》、第 3 回展(1933)に《静物》3 点、パリ展(1934 パリ・装飾美術館)に《静物》、第 4 回展(1935)に《画家像》《竈馬と野菜》《花果図》《玻璃鉢の葡萄》《コップの花》《柘榴》《残果》の 7 点、第 5 回展(1936)に《無題》、第 8 回展(1939)に《炭》をそれぞれ出品した。1943 年日本版画奉公会会員。1945 年の東京大空襲により自宅にあった一切の作品を焼失。戦前の作品をよく知る恩地孝四郎は、『日本の現代版画』(創元社 1953)の中で、「日本の新美術運動の主導体だつたヒュウザン会に出発し、その自刻になるポスターは愛好家の愛蔵するところだが、中途版画作を遠ざかり、再起した折は入念な伝統技法に即いたために、甚だ寡作であつた上、戦災によつて、その作も殆ど失われたらしい。遺憾である。清美玲琅たる画趣である。近時僅に蔵書票などの小品を物したが、鑑賞画の新作が待たれて居る。板目木版」と評している。1969 (昭和 44) 年 10 月 5 日東京で逝去。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録前篇』

(東京文化財研究所 2006) / 恩地孝四郎『日本の現代版画』(創元社 1953) / 『エッチング』123 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

瀬尾永敏 (せお・ながとし)

1932年8月日本水彩画会主催の夏期講習会(東京美術学校会場)の参加者を対象にした夜間のエッチング無料講習会(西田武雄エッチング研究所会場)に参加する。当時は石川県立松任高等女学校教諭で、その後は七尾高等女学校、金沢第二中学校などに勤務する。『エッチング』71号(1938.9)に「七尾の講習」を寄稿。1943年日本版画奉公会会員となる。【文献】『エッチング』1・71・127(樋口)

関 すゝむ (せき・すすむ)

1931(昭和6)年の第1回日本版画協会展に木版画《築地河岸》を出品。【文献】『日本版画協会第一回展覧会出品目録』(三木)

瀬川艶久 (せがわ・つやひさ)

名古屋の後藤版画店から妖艶な美人画(版画)を出版していることから、名古屋の人かと思われる。小顔で艶麗な美人姿態を描き、版画同様の落款のある肉筆画も見られる。資料として、1935(昭和10)年の『浮世絵芸術』2月号と11月号に掲載の後藤版画店広告には、「艶久」に関して「唐人お吉を描いては当代日本一流作者瀬川艶久画伯は西山翠璋門下の逸材にして且つて聖徳太子展に出品大作《唐人お吉》当時週刊朝日誌上に激賞され作品は現に下田開港会議跡に仙寺内武山閣にあり」とある。さらに『唐人お吉十二姿』12点組(200絶版・木版数十度摺・越前生漉奉書・特製更紗映入)刊行については、「摺は中部日本が生んだ木版手摺の名工中村喜三郎氏が一生をかけてその妙技を振った会心の力作、然も多分のエキゾチックとエロ味を以て浮世絵版畫の真髓を伝えた名画」とする。12枚の各題は《お吉ラシャメン姿》《夏祭とお吉》《悲しい運命も知らず恋に酔ふ》《お吉の湯上り姿》《名主あづけ》《お吉は侍妾に》《酔ふては玉泉寺へ》《お吉は芸者に》《お吉の酒乱》《故郷をあとに江戸への旅》《酒と三味線に日を送る》《人の世の秋》。他に前納すると「裸婦四題」進呈とある。艶久の履歴をはじめ、このシリーズがすべて発行されたか等、不明な点が多い。【文献】『近代美人版画全集』(阿部出版 2000)(岩切)

関 長造 (せき・ちやうぞう) 1913 ~ 1976

1913(大正2)年8月25日富山県高岡市神田1番地に生まれる。1931年富山県立高岡工芸学校金属工芸科を卒業し、東京美術学校彫刻科塑造部に入學。在学中、校友会版画部に参加し、1932年に校内で開かれた第14回版画部展(7.16~17)に出品した。彫刻は、1934年再興第21回日本美術院展に《裸女習作》が初入選。翌年の第22回展にも《立像習作》が入選し、1936年同校彫刻科塑造部本科を卒業。卒業後も院展に出品を続け、戦前は第23~25回展(1936~1938)、第27~30回展(1940~1943)に出品。1937年院友に推挙され、1942年の第29回展出品作《青木氏像》で日本美術院第二賞を受賞した。なお、1939年第26回展の不出品は1938年に兵役に就いたためと思われる。1942年からは市立高岡女子実業学校、県立高岡工芸学校の講師を務めた。戦後も院展(彫塑部は1961年解散)を中心に活動を続け、また1951年から

1972年まで高岡市美術作家連盟彫刻部委員を務めるなど地域の美術活動の発展にも尽くし、1966年には高岡市民功労者に選ばれている。1976(昭和51)年1月25日高岡市で逝去。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) / 「作家略歴」[関 長造]『日本美術院百年史』7(日本美術院 1998) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

関 藤吉 (せき・とうきち)

明治後期に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻1号(1908.2)に石版画《虹の後》を中嶋仲と共同で発表。その後は第1巻6号(1908.7)に石版画《工場所見》、第1巻8号(1908.9)に石版画《工場のスケッチ》《にしめや》を発表する。【文献】『虹』1-1・6・8 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

関 松太郎 (せき・まつたろう)

1931年頃に愛知県半田町の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第5号[1931]に木版画(題名不詳)、第10号[1935]に《柿》を発表。現在『運』は5~7・10号[1931~1935]のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

関 頼武 (せき・よりたけ)

1939(昭和14)年の第3回造型版画協会展に木版画《葉ぼたん》に初入選。出品時は横浜に住む。その後も同展の第4回展(1940)に《塔》、第5回展(1941)に《仁王》、第6回展(1942)に《支那の家》を連続して出品した。【文献】『造型版画展目録』(三木)

関 露香 (せき・ろこう)

大阪毎日新聞社の記者として1909年の大谷探検隊インド旅行・仏跡調査に同行し、橘瑞超『中亞探検』(博文館1912)の編集や『本派本願寺法主大谷光瑞伯印度探検』(博文館1914)、『実話 モルガンお雪』(1916)、『流人頼朝』(番町書院1926)などの著作を持つ。版画については、[石版画集]『新風景』第1輯(番町書院1924.2 全9枚)を刊行。「暗黒から光明へ移り来たった帝都の色彩は驚くべきものであるが、各地方に及ぼした自然の大破壊力に至っては、百年は愚か千年を俟つとも、復た如何ともすることの能きぬ変化である。(略)私は此の驚くべき変化を見るべく、(略)絵となるべき新風景の幾十枚かを獲たので、今茲に之を出版して同好の士に頒たんとするのである」と発刊の主旨を語っている。【文献】『山田書店新収美術目録』109(2015春) / 国立国会図書館・近代デジタルライブラリー(樋口)

関口高二郎 (せきぐち・こうじろう)

東京の料治熊太が主宰する『版藝術』第9号(1932.12)「全日本版画家年賀状百人集」と第21号(1933.12)「創作版画年賀状傑作集」に木版画による同じ図柄の年賀状が1点収載されている。俳句を嗜んでいたように、司法代書人の傍ら、俳人であった村上鬼城を追想した文章が残されている。【文献】「鬼城翁を憶ふ」『村上鬼城』第2巻(あさを社 1974) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

関口 寿 (せきぐち・ひさし)

明治後期に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻10号(1908.11)に石版画《門付け》《猫》の2点を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

関根芳男 (せきね・よしお) 1914～

1914(大正3)年に生まれる。詩人で俳人。関根芳男は本名。俳句の号は黄鶴亭。詩人としては九雀を使用。1939年に詩集『九雀詩抄』を上梓。印刷者は関根芳男、出版元は九雀荘であり自身で発行したもの。戦後の著作は、関野準一郎の版画で表紙や頁を飾り出版している。『詩集 ふるさとの鶯』(1952.5刊)では関野の木版画一葉入りで、また『詩集 寂しい猫』(1952.7)では銅版画3葉を入れて、大雅洞から出版。1973年には関野の木版画を挿画にして句集『掌の載せて青き葡萄よ』(麦叢書第20編 大雅洞)を上梓している。版画制作については、東京の料治熊太が主宰する『版藝術』第9号(1932.12)「全日本版画家年賀状百人集」に木版画による年賀状を1点発表。当時、東京市神田区多町(現・千代田区神田多町)に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

関野準一郎 (せきの・じゅんいちろう) 1914～1988

1914(大正3)年10月23日青森市に生まれる。1930年に根市良三と知り合い木版画を始め、根市が主宰する『緑樹夢』に参加。同年、佐藤米次郎・根市良三・福島常作らと青森創作版画研究会「夢人社」を結成し、版画同人誌『彫刻刀』(1931.6)を発行。なお同誌は、1933年1月に『陸奥駒』(第1～9集まで編集代表)と改題し、さらに1939年には『青森版画』と改題するが第2号(1939.5)で終刊。1932年の第2回日本版画協会展に木版画《孔雀模様》が初入選し、その後は、第3回展を除き、第55回展(1987)まで出品。その間、1938年の第7回展で会員に推挙され、1955年から57年まで日本版画協会の事務所を引き受けた。一方で、1932年に版画家今純三に師事し、銅版画・石版画技術の習得に励む。1934年には日本エッチング研究所(所長:西田武雄)からエッチングプレス機を購入し、本格的に銅版画制作に取り組む。翌年西田武雄を講師に迎え、「洋画及びエッチング座談会」の開催に協力する。1936年には今純三・川崎正人と「青森エッチング協会」を設立するとともに、同年の文展鑑査展に銅版画《河畔》が初入選する。また、1937年の第12回国画会展には銅版画《冬》が入選する(国画会展は第14回～第61回展まで出品を続け、第18回展で版画部会友に推挙される)。同年(1937)第1回新文展に銅版画《埠頭裏》が入選する。1938年には西田武雄・武藤完一らを迎えて、再び「エッチングと木版画講習会」を開催。同年第25回二科展に油絵を出品し、初入選する。1939年上京し、杉並区荻窪の和楽荘に住む。志茂太郎(アオイ書房主人)に恩地孝四郎を紹介され、以後、恩地を生涯の師として仰ぐ。同年から山口源と共に版画の研究会「一木会」を恩地家で開く。又、鈴木千久馬主宰の「絵画研究会」でデッサン・油絵を学ぶ。1940年「日本エッチング作家協会」が設立し会員となり、日本エッチング展(第1～3回展)に出品。1943年「日本版画奉公会」設立に際しては理事となる。1944年には『一木集』が創刊され、表紙を銅版画で描く。戦後は、1946年に再開した第14回日本版画協会展に出品。また、翌1947年の第21回国画会展において版画部会会員に推挙される。以後、この2つの展覧会を中心に置き、1948年からは個展を始めとして、美術団

体連合展等の展覧会に作品を発表。さらに、サンパウロ・ビエンナーレ展、リュブリアナ国際版画展、東京国際版画ビエンナーレ展等々の国際公募展に作品を発表し、第31回ノースウエスト国際版画展(1960)で買上賞を、第4回リュブリアナ国際版画展(1961)では木版画《墓とニューヨーク》が優秀賞を得る。また、関野の重要な活動として、私家本・限定本・装幀などの仕事があり、『ヴィナスの誕生』(私家本 1949)などはその代表的なものである。そのほか版画の教育普及活動にも尽力し、1948年の新版画夏季講習会(神田・今川女子高等学校)や現代版画研究会(委員長:恩地孝四郎)に幹事として参加し、1951年には自宅に銅版画研究会を立ち上げた。また、1953年には日本銅版画協会を設立し、理事長として、銅版画講習会、日本銅版画協会展などを企画し、若手版画家の育成と銅版画の普及に努めた。さらに1951年の「日本教育版画協会」(理事長:平塚運一)、1953年の「国際版画協会」(理事長恩地孝四郎)の設立に際し理事となった。1958年にはジャパン・ソサエティの招聘により渡米し、ワシントン大学、オレゴン州立大学で日本の木版画の講義、制作実演を行い、以後アメリカでの木版画の普及に努めた。国内に於いても金沢美術工芸大学(1960～1964)、神戸大学教育学部(1964～1971)に於いて非常勤講師として教鞭をとり若手版画家の育成に尽力する。1972年文化関係功労者として青森市民表彰を受け、1975年に木版画集『東海道五十三次』が芸術選奨文部大臣賞(美術部門)を授賞し、翌年には木版画《紅型》が昭和50年度文化庁買上優秀美術作品となっている。そして1981年紫綬褒賞を授賞、さらに1987年には勲四等に叙せられ、旭日小綬章が授与された。また、1988年には調布市文化功労者賞を授与されている。1988(昭和63)年4月13日東京にて逝去。【文献】関野準一郎『版画を築いた人々』(美術出版社 1976)／関野準一郎『近代日本版画家列伝 わが版画師たち』(講談社 1982)／『昭和の版画師 生誕100年 関野準一郎展』(録 青森県立美術館 2014) (河野)

関谷五八郎 (せきや・ごはちろう)

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した『櫟』第1輯(1933.8)に《丘》、第2輯(1934)に《賀状》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」』『臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

関谷忠雄 (せきや・ただお) 1909頃～没年不詳

1909(明治42)年頃東京に生まれるか。1921年早稲田実業学校に入学か。1925年小野忠重ら学友5人で絵の会「沓人会」を結成した。1926年2月「沓人」を改称した同人誌『みのる』を創刊、4月発行の第2号の装幀を担当した。牧神詩社をおこし、1929年末頃に編集兼発行者として詩と版画の雑誌『牧神』を創刊(未見)、第2号(1930.2)に木版画《風景》を掲載した。その後、同誌の第4号(7月)に木版画《愛児像》と詩「貝、菊」、第5号[2巻5号](8月)に《風景》など木版画4点と詩「敗残」など、2巻6号(9月)に《無題》の小品木版画2点と数篇の詩、2巻7号(10月)に「松籟」などの詩、8号(11月)に詩「貧しき庭」、第23号[3巻4号](1932.7)に4篇の詩と評論、第24号[3巻5号](9月)に数篇の詩を掲載したことが確認されている。1932年4月新版画集団の結成に創立会員として参画する。その後集団の展覧会には一度も出品しなかった

が、同年6月に創刊された集団の機関誌『新版画』創刊号の編集を担当、その後同誌3号(8月)に木版画《マッチペーパー四種》、4号(9月)に詩「明け方の海」、6号(11月)に詩「手」を寄せた。また4号・6号・7号(1933.1)、9号(6月)の編集を担当した。1933年3月創刊の『新版画 Leaflet』創刊号の編集を担当し、この号に詩も寄せた。また同年1月に段塚青一(新版画集団第4回展出品)が岡山県で創刊した版画誌『版画と詩』の第3輯(5月)に詩を寄せた。これらの版画誌以外にも、鯨詩社をおこして1934年9月に詩の同人誌『鯨』を創刊し、小野忠重や藤牧義夫ら新版画集団メンバーの版画などを掲載した。【文献】『創作版画誌の系譜』(滝沢)

関谷治男(せきや・はるお)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)4年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928~1932)の再刊を意図して、5年生の鈴木善壽・小松行高らが中心となって版画誌『刀 再版』を創刊する。関谷はそれに参加し、第1号(1940)に《羽黒山》、第2号(1940.10)に《堀》、第3号(1941)に《お使ひ》、5年生に進級後の第4号(1941)に《参道(羽黒山)》、第5号(1941)に《村》を発表。その後、『刀 再版』は、熱心だった佐伯正一や関谷らの卒業と共に第5号で休刊してしまう。「治夫」の表記もあり。【文献】『創作版画の川上澄生』(鹿沼市立川上澄生美術館2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

瀬下千秋(せしも・ちあき)

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した『櫟』第1輯(1933.8)に《月明》を発表。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

瀬戸垣 寛(せとがき・ひろし)

1938年頃、飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版ゑ』(ひだ版の会)第1号[1938]に《北の窓より》を発表。作者言には晴れた日曜、窓から見える景色や雪解けの音に、春を感じたようでその気持ちを書いている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

瀬谷翠古(せや・すいこ)

東京の料治熊太が主宰する版画誌『版藝術』第18号「全国郷土玩具版画集」(1933.9)に《首振り鼠》として阿波の木彫り郷土玩具を木版画で発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

芹沢銈介(せりざわ・けいすけ) 1895~1984

1895(明治28)年5月13日静岡県静岡市に生まれる。旧姓は大石。1912年県立静岡中学校を卒業。1913年東京高等工業学校図案科に入学し、印刷図案を学ぶ。1916年同校を卒業し、静岡の生家に帰る。1917年結婚し、芹沢姓を名のる。県の工業試験場に勤め、木工・染色などの図案の指導。1921年には大阪府立商工奨励館図案課に勤務するも、翌年退職。以後個人作家の道を選ぶ。1927年柳宗悦の論文「工藝の道」に感銘を受け、以前から興味があった染色の道に入り、また翌年の御大礼記念国産振興博覧会で沖縄に伝わる伝統的な染の技法「紅型」に魅せられ、以後「紅型」の追求に取り組んだ。1929年の第4回国画会展に蠟染による《紺地蔬菜文壁掛》を初出品し、

国画奨学賞を受賞。この頃から柳の主唱する「民藝運動」に実作者として強くかかわるようになった。その後も1936年の第11回展まで連続して出品。その間、多くの傑作を創作し、1930年に会友、1932年には会員に推挙された。1934年には東京・蒲田に工房を建て、移住。1938年から翌年にかけて柳宗悦らと沖縄へ渡り、「紅型」の技法を学んだ。また、1943年の第6回新文展には《型染の帯(紙漉)》を無鑑査出品した。このような芹沢の染色の仕事は、着物・着尺・帯・壁掛け・のれん・屏風などと多彩であるが、「芹沢本」と呼ばれる版を使った装幀・型染絵本がある。戦前の代表的なものとしては、1931年に柳宗悦が創刊した雑誌『工藝』の創刊号から第12号までを飾った型染の布表紙絵がある。この装幀は高い評価を受け、以後、型染布表紙の依頼が多くなり、一般の単行書・雑誌の装幀も増加した。1936年には合羽刷手彩色による最初の型染絵本『わそめゑかたり』(私刊 1936.9)『和染絵語』(私刊 1936.9)を制作し、その後も『絵本どんきほうて』(向日庵刊 1936.10)『諸職道具紋つくし』(私刊 1938.1)『法然上人絵伝』(日本民藝協会 1941.3)を刊行。また、1943年には合羽刷から型染本へと進み、私家本『東北窯めぐり』(私刊 1943.9)『益子日帰り』(私刊 1943.11)などを刊行している。戦後は、1947年に柳宗悦・濱田庄司・河井寛次郎らと国画会工芸部を再建。1949年に女子美術大学教授となり、後進を指導。1956年には「型染」で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定され、1966年紫綬褒章を受章。1976年に文化功労者となっている。1981年には静岡県立芹沢銈介美術館が開館。また、1983年にフランス政府より芸術功労賞を贈られた。名実ともに染色作家の第一人者として活躍し、その作品は日本だけでなく海外からも高く評価されている。1984(昭和59)4月5日東京都港区の虎の門病院で逝去。【文献】『芹沢銈介展』図録(宮城県美術館 1985) / 『日本美術年鑑』昭和60年版(東京国立文化財研究所 1987)(三木)

千頭清策(せんとう・せいさく)

東京の文化学院専修科は1933年4月から石版、肖像画等の講習会を始め、エッチングについては第1回を10月に、第2回を11月にそれぞれ1週間、日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催した。在学中の千頭もそれらの講習会に参加し、第1回で制作した作品が西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第12号(1933.10)に掲載されている。その前年には講習会で一緒だった大石俊彦・大橋文子・野中栄吉らと共に、「青丹会第1回展」(1932.10.26~30 銀座・紀伊国屋)を開催したが、出品作品は不明。【文献】『美術界』『みづゑ』333(1932.11) / 『エッチング』12・14(加治)

仙波均平(せんば・きんべい) 1885~1977

1885(明治18)年東京府荏原郡(現:品川区)大崎白金猿町に生れる。1905年慶応義塾を卒業。その後太平洋画会研究所で中村不折・満谷国四郎に師事した。1910年農商務省主催の美術工芸展に出品し、農商務大臣褒状を受賞。またこの年の第4回文展に《静物》を出品した。さらに太平洋画会第8回展に《菜の花》など4点の油彩画を出品した。同展にはこれ以後、第9回展(1911)、第10回展(1912)、第11回展(1913)、第12回展(1915)に出品したが、第12回展は会員としての出品だった。1913年光風会第2回展に油彩画を出品、1914年開催の二科第1回展にも油彩画を出品した。1915年に渡米し、

ニューヨークで油彩画を研究、1921年パリへ移ってモンマルトルのアトリエで制作した。1924年に帰国、日本橋・丸善、大阪・白木屋で個展を開催した。1928年から慶応義塾普通部で図画教師を勤める。1929年台湾、沖縄を旅行し、翌1930年に台湾スケッチによる個展を銀座・資生堂で開催した。『エッチング』誌によれば、少なくとも1934年以降、慶応義塾で西田武雄らによるエッチング講習会を開き、自分と生徒らの銅版画の理解とその技術の向上につとめた。また1935年より毎年、慶応義塾普通部美術部によるエッチング展を開催した。駒井哲郎は1933年に同校に進学し、仙波から直接指導を受けて版画家となった人であった。東京藝術大学大学美術館に19点の西洋画が収蔵されている。1977（昭和52）年逝去。【文献】『エッチング』／『近代日本アート・カタログ・コレクション 太平洋画会』2・3（ゆまに書房 2001）／『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社 1997）（滝沢）

泉波千鳴（せんば・ちなり）

1937（昭和12）年の第12回国画会展に木版画《乾魚》が入選。当時、京都市千本鞍馬口上ル東入に住む。翌1938年の第3回京都市展にも《柿樹》が入選。その後も第8回展（1943）に《薊》、奉祝京都市展（1944）に《鰻》を出品。また、1943年の第4回山南会展（1939年に土田麦徳門下の高橋太郎郎が結成）に《秋果》《くんせい》を出品している。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『日本美術年鑑』昭和19・20・21年版（国立博物館 1949）（三木）

仙波道子（せんば・みちこ）

大阪では1933年に前田藤四郎や武田新太郎らが中心となって版画誌『黄楊』が発行された。その創刊号（1933.8）に《角力》を発表。版画誌『黄楊』は創刊号のみ確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

【そ】

相賀 至（そうが・いたる）

東京の料治熊太が主宰する『版藝術』第9号「全日本版画家年賀状百人集」（1932.12）に木版画による年賀状が発表されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

曾我尾武治（そがお・たけはる）1899～1984

1899（明治32）年東京麹町に生まれる。下谷区入谷高等小学校卒業。1915年長原孝太郎に師事し、本郷洋画研究所に学ぶ。1926年の第13回光風会展に油彩画が入選。また、1927年第14回光風会展に《早春》が出品されているが、版画かどうかは不明である。1934年にはエッチングプレス機を入手していることから、この頃から西田武雄らと関係を持っていたことは推察される。1934年の第21回光風会展に銅版画《水郷》、1936年の二部会展に銅版画《布晒す家》、同年の文展鑑査展に《船の修理所》、1937年の第1回新文展に《春浅き水辺》、同年の第1回造型版画協会展に《月島にて》、1939年の第3回文展に《波止場》を出品し、それぞれ入選した。1940年には西田武雄が社長している「廣山謄写版インキ製造所」に今純三・関野準一郎とともに入社。また同年の「日本エッチング作家協会」（会長：田辺至）の設立に参加し、評議員となる。この年の第1回日本エッチング作家協会展に《納屋》、また1942年の3回展に《造船所》を出品する。戦

後は、1949年から暫く埼玉県桶川中学校で教鞭をとる。1959年の「日版会」の設立には、棟方志功・永瀬義郎らとともに参加。作品は写実的な風景画を得意としている。1984（昭和59）年に逝去。【文献】『今純三・和次郎とエッチング作家協会』（渋谷区立松濤美術館 2001）／東京文化財研究所『昭和期美術展覧会出品目録』（中央公論美術出版 2006）（河野）

素石（そせき）➡古瀬素石（こせ・そせき）

曾禰原 絹（そねはら・きぬ）

長野県安曇野の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』（1937～1938）を発行する。その第1号（1937.3）に《子供達》、第2号（1938.5）に《アザミ》を発表。当時、北安曇野郡池田小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

染木 照（そめき・あつし）1900～1988

1900（明治33）年東京市四谷区に生まれる。出生時は河田姓で、祖父は佐藤一斎の養子となった昌平黌の儒官・河田迪斎。1919年開成中学卒業、入学時の同級に村山知義がいた。1922年東京美術学校西洋画科に入学、在学中の1925年に三科第2回展（公募展）に《構成》（構成物）などを出品した。またこの年に美校卒業生・在学生らと舞台装置研究グループ「牧神の会」を結成し、「演劇美術展覧会」を開催した。1926年「単位三科」結成に加わる。また伊藤熹朔・千田是也兄弟らの新興人形劇団「人形座」同人となり、第1回公演のウィットフォーゲル作「誰が一番馬鹿だ？」上演に参加した。1927年東京美術学校を卒業、この年単位三科による「三科形成芸術展覧会」に出品し、会期中上演の「劇場の三科」で人形劇を演出上演した。また、美校西洋画科同期生らの親睦団体「上社会」を創立した。さらにこの年牧神の会を発展させた「舞台美術協会」結成に参画した。ただし、満鉄囑託として渡満したためこの年開催の第1回展には出品せず、1929年開催の第2回展に出品した。その年開催の槐樹社第6回展に出品、以降1931年解散まで毎回出品した。また1929年に染木家の名跡を継いで染木姓となった。1930年上社会第3回展に出品し、以後毎回出品する。1934年東光会第2回展に出品し、以後1935年の第4回展まで出品した。この一方で1934年初めから9月末にかけて「南洋群島」のほぼ全域を旅行、スケッチや油彩画制作のほか土俗・工芸品などの蒐集、民族誌学調査を行った。旅行は日本が国際連盟を脱退した1933年に、長兄が拓務次官を務める拓務省が復刊発行した、外叔父である田口卯吉発行の『南島巡航記』（1893刊）を読んだことや、ドキュメンタリー映画「海の生命線—我が南洋群島」を見たことなどによって「南洋群島」への想いが高調に達したことが理由であった。帰京後は1934年に「染木照南洋作品展」（日動画廊）を開催したほか、「染木照南洋旅行画会」を設けて作品を頒布した。翌1935年にも「染木照南洋風物銅版画頒布会」を設けたほか、「染木照蒐集南洋土俗工芸品展」（資生堂ギャラリー）や「染木照蒐集南洋民芸展」（銀座・アモレ画廊）を開催して、「南洋群島」旅行の成果を発表した。以後、上社会・東光会・主線美術協会に「南洋群島」旅行で想を得た、多様な造形様式の油彩画、版画（エッチング・リトグラフ・ステンシル）、素描を出品した。版画の制作を始めたのも「南洋群島行」を契機として、旅行

で描いた大量のスケッチを銅版画にして多くの人に見て
もらいたいと考えたためであった。そうした考えを実現
するために、旅行から帰った直後に西田武雄を訪ねてエッ
칭ングを習い、また独自に西田主宰の日本エッチング研
究所のプレスを購入して制作に励んだ。その成果は1939
年開催の橋口康雄と三木辰夫との「版画三人展」（日動画
廊）でも公表した。一方この年には満蒙・北支をスケッチ、
民族誌学調査のため旅行した。その成果は1941年に『北
満民具探訪手記』（座右寶刊行会）として上梓されている。
1940年「南洋美術協会」発足に参加、翌年開催の第1回
展に出品した。1942年山西学術調査研究団、学士院蒙疆
調査団に参加した。1945年『ミクロネシアの風土と民具』
（彰考書院）を上梓。戦後は教員をしながら上社会展や個
展で油彩画・版画・木彫などを発表した。1988（昭和63）
年東京で逝去。【文献】滝沢恭司「ミクロネシアの誘い—
1934年、染木煦の南洋群島行」『アジア地域における版
画文化と版画教育の現状』（武蔵野美術大学版画研究室
2007）／『美術家たちの「南洋群島」展図録』（町田市立
国際版画美術館ほか編集 2008）（滝沢）